

國立政治大學日本語文學系

碩士學位論文

指導教授：徐翔生 博士

近世文芸作品に見られる仏教思想
—『曾根崎心中』における救済—



研究生：涂雅涵 撰

中華民國一百零七年八月

近世文芸作品に見られる仏教思想

—『曾根崎心中』における救済—

要旨

近世の文芸作品『曾根崎心中』では、恋人が一蓮托生し、未来成仏のことが書かれている。しかし本来の仏教では、人間が現世の執着を放棄すべきだと唱えている。以上のように、『曾根崎心中』に見られる仏教思想は本来の仏教思想と矛盾している。本論文では、『曾根崎心中』に見られる仏教思想を考察しながら、仏教の観点から『曾根崎心中』と仏教思想と比較したいと思う。

本論では、まず心中の文化史をはじめ、近松文学の特色とその最も代表的な心中物『曾根崎心中』について述べる。次に、『曾根崎心中』に書かれている「観音廻り」と「心中の道行」を中心に、この二つの場面に見られる仏教思想について論じてみる。最後に、遊女思想、女性成仏、一蓮托生、未来成仏などの思想をめぐる、浄土信仰の観点から『曾根崎心中』における救済思想を論述する。

周知のように、仏教では人間が執着・愛欲を捨てるべきだと強調している。ところが、『曾根崎心中』に見られる仏教の救済思想は、本来の仏教思想とは異なっている。この作品は遊女思想、女性成仏、法然の念仏往生、親鸞の悪人正機などの救済思想と深くかかわっている。そのために、『曾根崎心中』では男女主人公の心中は「後の世もなをしも一つ蓮」「未来成仏疑ひなき恋の。手本となりにけり」という美しい結果が現われ、その恋が成就できたのであろう。

キーワード：『曾根崎心中』、仏教思想、浄土信仰、未来成仏、一蓮托生

近世文藝作品中的佛教思想

—《曾根崎心中》的救濟—

摘要

日本近世文藝作品《曾根崎心中》，強調情侶死後可以一蓮托生與未來成佛，與佛教思想有密切之連結。但從佛教的觀點來看，人於死前必須捨棄所有對現世的執著，才能未來成佛與一蓮托生。自此可以觀知，《曾根崎心中》中的佛教思想，與真正的佛教思想有所矛盾。本論文考察《曾根崎心中》的佛教思想，從佛教救濟思想的觀點，探討《曾根崎心中》與佛教思想之差異。

論文首先介紹殉情的文化史，其後說明《曾根崎心中》作者近松門左衛門的文學特色，並解說其代表作品《曾根崎心中》。爾後聚焦作品中「觀音巡禮」及「心中道行」的佛教思想，最後再以遊女的思想、女性成佛、一蓮托生及未來成佛的思想為例，從日本淨土信仰的觀點，探討《曾根崎心中》的救濟思想。

綜上所述，佛教主張人應捨棄愛慾執著，才能往生淨土與成佛。但《曾根崎心中》所見的佛教思想，卻與佛教思想有所矛盾，而與日本的遊女思想、女性成佛以及法然·親鸞的淨土思想有更密切的關連。或許正因如此，《曾根崎心中》的男女主角，才能一蓮托生與未來成佛，成為後世戀愛的範本。

關鍵字：《曾根崎心中》、佛教思想、淨土信仰、未來成佛、一蓮托生

目次

第一章 序論.....	2
第一節 研究動機.....	2
第二節 研究目的.....	3
第三節 先行研究.....	4
第四節 研究内容および研究方法.....	6
第二章 『曾根崎心中』とは何か.....	9
第一節 心中の文化史.....	9
第二節 近松文学と心中.....	13
第三節 近松文学の特色.....	16
第四節 『曾根崎心中』.....	21
第三章 『曾根崎心中』に見られる仏教思想.....	25
第一節 お初の観音廻り.....	26
第二節 観音廻りと観音信仰.....	27
第三節 心中の道行.....	30
第四節 道行に見られる浄土思想.....	33
第四章 『曾根崎心中』における救済.....	37
第一節 遊女 of 思想.....	37
第二節 女性成仏.....	40
第三節 一蓮托生と未来成仏.....	42
第四節 浄土信仰の救済思想.....	44
第五章 結論.....	50
参考文献.....	58

第一章 序論

第一節 研究動機

近世の日本文芸作品といえば、「元禄の三文豪」といわれる井原西鶴、松尾芭蕉と近松門左衛門を取り上げなければならない。元禄時代に、町人の発展がめざましく、一種の文学を生み出した。特に近松門左衛門の作品では、町人の社会を反映した作品が多いため、それが浄瑠璃や歌舞伎の舞台上で演じられてから、当時の社会では非常に人気を得られた。そして、近松門左衛門の作品を研究する際、おそらく心中物を取り上げられるのは多いだろう。特に元禄十六(一七〇三)年に、真実事件をもとに改編した『曾根崎心中』が浄瑠璃の舞台上で登場してから、当時の人々を魅了させたのは過言ではない。

実際、『曾根崎心中』の中で、仏教思想があふれていることから、この作品は仏教思想のもとで成立したとも考えられる。周知のように、『曾根崎心中』において、最初の「観音廻り」と最後の「心中の道行」が最も有名である。「観音廻り」とは、この作品の主人公お初が、当時大坂の有名な三十三番の観音札所を巡礼することであり、また「心中の道行」とは、この作品の中で一番最後のところ、主人公の徳兵衛とお初が心中に行く場面を描いている部分である。この二つのところに共通して特に注目されるのは、その中に潜んでいる仏教思想であろう。例えば、『曾根崎心中』冒頭の観音廻りに、「今此娑婆に示現して。我らがための観世音仰ぐも高し高き屋に」、「恋を菩提の橋となし。渡して救ふ観世音誓ひは。妙に有難し」と書かれている。そして、この作品の一番最後の心中の道行に、徳兵衛とお初は「取伝え貴賤群集の廻向の種。未来成仏疑ひなき恋の。手本となりにけり」と描かれている。

以上のように、『曾根崎心中』においては、仏教思想がよく見えており、仏教の救済思想が明らかに見られている。なお、お初の観音廻りが終わった後、次のように述べられている。「草のはす花世にまじり、三十三に御身をかえ色で。導き情で教へ、恋を菩提の橋となし、渡して救ふ観世音。誓ひは妙に有難し」という。ここでは、観音様が衆生を助けるため、三十三の姿で人間を導き、恋を菩提で浄土へ渡して助けると書かれている。以上のように、この作品では仏教の救済思想が見られている。このような救済思想は大変興味深く感じられる。

上述の例を一見すると、仏教思想だと受け取られているが、本来の仏教では、この世における煩惱や執着などを放棄すべきだと唱えている。ところが、『曾根崎心中』では、徳兵衛とお初の心中が「未来成仏疑ひなき恋の。手本となりにけり」と書かれている。これは本来の仏教思想と矛盾しているのではないかと思う。

本研究では、『曾根崎心中』に見られる仏教思想を分析し、仏教の救済思想の観点から本来の仏教思想と比較したいと思う。

第二節 研究目的

本論では、『曾根崎心中』に仏教思想があふれている「観音廻り」と最後の「心中の道行」を取り上げ、その二つのところに見られる仏教の思想を解釈していく。また、この作品における独特な救済思想をめぐって論述していきたい。そして、仏教思想を説明しながら、『曾根崎心中』に見られる仏教思想と比較し、その相違を深く探りたい。また、その相違を通して、この作品には一見すると仏教思想があふれていると考えられているが、実は本来の仏教と異なる観点が出ているという結論を新たに付け加えたい。この研究は、今まであまり触

られなかった日本特有の浄土思想を通して、『曾根崎心中』を異なる観点から新しい見解を見出すことができればよいと思う。

第三節 先行研究

近松門左衛門という人物について、宮原英一は『若き日の近松門左衛門』では、民衆の愛の閉塞の時代の苦悩とを、世話物として登場させたのが、近松門左衛門であるという。近松の作品に出てくる人々は、純愛のために命をかけてもいい人たちが、最後心中にいたってしまったと述べている¹。

そして、田中澄江は『近松門左衛門という人』に、近松が書いた世話物は二十四篇であるが、その中で心中物が十一篇も占めていると指摘している。その心中物に、特に『曾根崎心中』は多くの観客の心を驚掴みに成功した。そのことから江戸時代の心中の流行は、『曾根崎心中』と関連があるのではないかと述べている²。

藤野義雄は『近松と最盛期の浄瑠璃』において、元禄時代までの演劇や文学は、権力者やヒーローが主役であったが、近松が町人や遊女など社会的な弱者を主人公として舞台にあげたので、庶民の関心を引き入れたという³。

河竹登志夫は『歌舞伎』において、『曾根崎心中』には最初の観音廻りと最後の心中の道行が二つある。観音廻りと心中の道行では、日本独自の美意識を見出すことができ、作品の中で一番魅力的なところだと指摘している⁴。

以上は近松門左衛門及びその作品に関する研究である。一方、仏教の視点か

¹宮原英一『若き日の近松門左衛門』（1998）叢文社 p.8

²田中澄江『近松門左衛門という人』（1984）日本放送会 p.123

³藤野義雄『近松と最盛期の浄瑠璃』（1980）桜楓社 p.109-110

⁴河竹登志夫『歌舞伎』（2001）東京大学出版会 p.203

ら行われる研究も見られている。たとえば、村松剛は『死の日本文学史』、に指摘したように、『曾根崎心中』をはじめ、すべての心中物は仏教思想、特に浄土信仰に基づいて作られており、仏教信仰に支えられてきたという⁵。このような解釈は石田瑞麿の『日本古典文学と仏教』にも見られている⁶。

高島元洋は「情による超越—他界から虚構へ」では、観音廻りを次のように解釈している。高島元洋によると、徳兵衛とお初は神仏によって救われたのではなく、徳兵衛が観音となったお初に救われたので、二人が一緒に「未来成仏疑ひなき恋の。手本となりにけり」という⁷。同じ見解で、岸田秀樹が「曾根崎心中の歴史社会学的分析」で、徳兵衛にとってお初は衆生を救う観音菩薩と重なり、徳兵衛は観音菩薩となったお初に帰依し、自我の妄執から解放される姿と見ることができるという⁸。

そして、「一蓮托生」について、次のような解釈が見られる。相良亨によれば、一蓮托生は本来仏教的な考え方ではなく、日本の浄土信仰から生まれたものであるという⁹。それから、徐翔生は「曾根崎心中に見られる仏教」では、一蓮托生という思想は、現世利益が入っており、この世を「穢土」とする浄土信仰に矛盾していると述べている¹⁰。

以上の先行研究は、だいたい『曾根崎心中』についての解釈またはこの作品における仏教思想に関するものである。本研究では、『曾根崎心中』に現われ

⁵村松剛『死の日本文学史』(1975) 新潮社 p.228

⁶石田瑞麿『日本古典文学と仏教』(1985) 筑摩書房 p.374

⁷高島元洋「情による超越—他界から虚構へ」(『超越の思想』所収)(1993) 東京大学出版会 p.119

⁸岸田秀樹「曾根崎心中の歴史社会学的分析-書評：小林恭二著『心中への招待状・華麗なる恋愛死の世界』」(『藍野学院紀要第24巻』所収)(2010) 藍野学院 p.82

⁹相良亨「日本人の死生観」(『相良亨著作集4』所収)(1994) ペリかん社 p.93-95

¹⁰徐翔生「曾根崎心中に見られる仏教」(『政大日本研究第十二号』所収)(2015) 政治大学 p.34

ている仏教思想を中心に、仏教の救済の観点から、この作品に見られる救済思想を深く研究して、本来の仏教との相違を比較していきたい。

第四節 研究内容および研究方法

『曾根崎心中』には、最初の観音廻りから最後の心中の道行まで、仏教の救済思想があふれているが、本来の仏教思想と異なっているところもかなり存在している。そのゆえ、本論文は、『曾根崎心中』における救済思想を中心に、仏教思想と『曾根崎心中』に見られる仏教思想の相違を提出し、論述していきたい。

本論では、以下のような章立てで論述を進める。

まず『曾根崎心中』という作品を説明する。そしてこの作品は当時いかに風靡して、社会へ影響していったのかを見ていきたい。当時の社会にどのような影響を与えたのか、近世日本人の死生観にどんな影響を及ぼしたのか、それについて最初に検討していきたいと思う。

次に、『曾根崎心中』に見られる仏教思想を解釈する。まず最初のお初の観音廻りに潜んでいる観音信仰に関して説明したい。前述したように、高島元洋によると、『曾根崎心中』の観音廻りでは、お初が観音と出合った時から、その時すでに観音となったという。お初が観音となったため、徳兵衛を救うことができたと考えられる一方、私の考えでは、これはお初が遊女という身分、また観音信仰、女性成仏などにも関係があると思う。遊女 of 思想をはじめ、観音信仰をめぐって女性成仏の思想などを深く論究したいと思う。

それから、徳兵衛とお初の最後の心中の道行に注目したい。この作品に描かれている心中の道行に、どのような仏教的な意味を示しているのかを検討したい。そして、二人が「一蓮托生」への願望、死後果たして一緒に成仏して、恋

の手本になれるのか、これについても論説していきたい。

そして、『曾根崎心中』に現われている救済の思想について論述したいと思う。お初の観音化身から女性成仏の思想に目を付けたいと思う。仏教では、一般的に言えば、女性が成仏できないはずなのに、なぜお初が観音に化身して、徳兵衛を救うことができるのであろうか。このことについて、観音信仰や女性成仏の変身男子説などから分析していきたい。

また、仏教の浄土思想を取り上げ、この作品に見られる救済の思想を深く検討したいと思う。すでに述べたように、『曾根崎心中』に現れている仏教思想は、本来の仏教思想とは少しずれが出ている。勝浦令子によれば、仏教では、女性が欺・怠・瞋・恨・怨という五障を持っているので、死後成仏できないという¹¹。しかし、高島元洋と岸田秀樹の解釈では、この作品においては、お初が観音になったのである。これも一つの女性救済思想ではないかと思う。このような救済思想は、浄土宗の創始者である法然や浄土真宗の創始者である親鸞の思想などにも関連があるのではないかと思う。浄土信仰における救済思想から、これらについても論究していきたい。

最後に、『曾根崎心中』に現われている仏教思想と本来の仏教思想の相違についても比較したい。例えば、仏教の観点からすると、徳兵衛とお初の心中は、人の命を断つという重い罪を犯したということである。ところが、親鸞は異なる見解を持っている。中村元によれば、親鸞の浄土真宗では亡くなった人は、必ず先き立って浄土で家族や愛する人を待っていることであるから、人間が死後に、極楽浄土で会うことができるという¹²。このような浄土思想を通しながら、新たな観点から『曾根崎心中』を論説していきたい。この論文は近松門左衛門の心中物、および日本の仏教思想の研究に少しでも役に立つことができ

¹¹勝浦令子「女性と仏教」(『新アジア仏教史 11』所収)(2010) 佼成出版社 p.385

¹²中村元『仏教思想 1 愛』(1986) 平楽寺書店 p.288

ば幸いに思う。



第二章 『曾根崎心中』とは何か

近世の日本文学を考察する時、元禄文学を取り出さなければならない。元禄時代に、町人の発展がめざましく、独特な文学を生み出した。特に近松門左衛門の心中物は、当時の社会では非常に人気を得られた。近松の心中物の中で、もっとも有名なのは『曾根崎心中』である。『曾根崎心中』が浄瑠璃の舞台上で登場してから非常に注目された。これをきっかけに、江戸時代に心中が流行し始めたのである。そのため、本章では、まず心中の文化史を述べてみる。それから、近松の心中物と『曾根崎心中』について述べたいと思う。

第一節 心中の文化史

「心中」とは、昔からさまざまな意味が含まれてきた。一般的に、「心中」とは、「相愛の男女がいっしょに自殺すること」¹³が定義されている。では、何故相愛の男女がいっしょに自殺するのであろうか。まず心中の背景から見てみよう。

心中の背景から見ると、日本は古代において、人間の自然の性情に対して、肯定的な態度を持っていた。平安時代に入っても、地方ではまた素朴な気風が満ちていたが、平安京には、上流貴族の姫様の夢は後宮に入り帝の寵愛を受け皇后の位に上ることであったため、恋やはでやかな生活をめぐっての王朝文学がはやっていた。しかし、当時の社会が混乱し、朝廷の統制力がなく、地方の勢力はどんどん上がっていった。そのために、貴族の勢力もだんだんなくなってしまった。

¹³新村出『広辞苑』（1997）岩波書店 p.1332

中世に入ると、権力は貴族から武士に移り、主君への忠誠が最高の道德標準とされている。儒教も当時大きな影響を与え、封建社会の基盤となった。この時、荘園・公領が支配の単位になった。荘園は、天皇、貴族、寺社などの私有地で、現地の武士によって管理されていた。鎌倉時代以降、幕府が新たな支配勢力としての地位を確立された。こうした社会において、基本的な生産を担うのは農民であった。一方、いろいろな生業を営む人もいたし、商業に携わる者もいた。これを通して、商品交換の市場の形成、都市の成立に結びついた。その基盤で社会が安定し、民衆の身分が固定され、動かすのはかなり困難になった。

ところが、近世に入ってから、城下町の発展とともに、経済が活性化され、武士とは一線を劃した世界で庶民が活躍し始めていた。また、交通の自由や印刷術の伝入で、武士は支配階級の位置を占めていたが、町人は文化的な発展も発達になった。その理由は、豊臣秀吉が統治している頃、京都を根拠地として急速に発展していったからであるという。当時京都の町に人が集まり、商売の機会が増大した。天正十三（一五八五）年から、大坂、京都で続々と遊廓が許可され、慶長八（一六〇三）年に、徳川時代の開幕と伴って、江戸にも商人が集まり、元和三（一六一七）年に遊廓も許可された。長い抑圧から解放されるため、町人も遊廓へ行って、遊女との風流事が多かった。しかし、町人は経済能力を持っていたが、身分制度で上下の身分を守らなければならないため、謹厳な社会の鎖から逃れない。このように、遊女との恋愛も疑いなく成就できないはずであって、自由意志で恋を成し遂げないので、心中が多くなったのである¹⁴。

以上、時代背景を見ながら心中のことについて述べてきた。それでは、日本の心中はいつ頃出てきたのであろうか。心中の歴史を遡ると、奈良時代までに

¹⁴高野敏夫「遊女歌舞伎（六）」（『岐阜聖徳学園大学紀要』所収）（2003）聖徳学園大学 p.67

真の心中が見つからないという¹⁵。しかし、『古事記』の中巻に、佐保姫と佐保彦の心中が書かれている。佐保姫は垂仁天皇の皇后となっていたが、兄の佐保彦に夫と兄とどちらが愛するかと尋ねられて、「兄」と答えたところ、天皇を殺すように言われる。姫は三度短刀を振りかざして、耐えられずに涙をこぼした。天皇が目覚めてから、佐保姫は天皇を殺そうとしたことを述べた後、兄の元へ逃れてしまった。しかし自分の息子を道連れにするのが忍びなく、天皇に息子を引き取るように頼んだ。最後に炎に包まれた城の中で、佐保姫は佐保彦に殉じてしまったのである。

また、『古事記』の下巻に、允恭天皇の皇太子である木梨軽皇子と同母妹である軽大娘皇女の心中も記されている。允恭天皇が崩御した時、本来であれば長子である木梨軽皇子が即位するはずであった。しかし木梨軽皇子は、同母妹の軽大娘皇女と情を通じていて、近親相姦のために群臣が木梨軽皇子から離れて、その弟である穴穂皇子につく。それが原因となって允恭天皇の崩御後に廢太子された木梨軽皇子が、伊予国へ流される。その後、あとを追ってきた軽大娘皇女とともに心中したという。

平安時代の時、『大和物語』には二人の男子でどちらを選ぶかに迷った少女が川に投身して、その男子たちも一緒に少女の後を追って死んでしまったという心中のことも記載されている。昔、摂津の国に住む女の人がいた。その女の子に対し憧れている男が二人いた。男たちはある日、日が暮れると一緒に女の子の所へ来合わせた。女の子はどちらを選択するかと思い悩んで、男たちを生田川の川べりに呼びに来たが、その親は水鳥を射当てたとしたら娘を差し上げようと言った。その結果、一人は頭のほうを射たが、もう一人は尾のほうを射た。その時、どちらが先に射たか、と女の子は思い悩んでいる中、川に投身し、自殺してしまった。求婚していた男二人が、すぐに川の同じ所に落ち込んで、

¹⁵大原健士郎『心中考—愛と死の病理』（1973）太陽出版 p.38

一人は娘の足をつかみ、もう一人は娘の手をつかんで死んでしまったのである。

江戸時代になると、近松門左衛門の『心中刃は氷の朔日』にも書かれているが、江戸時代にはじめての心中は、天和三（一六八三）年の遊女・大和屋の市の丞と客長右衛門の生玉心中であるという¹⁶。天和三（一六八三）年の五月に、大坂新町の遊女市の丞と呉服屋の手代である客長右衛門が、生玉で心中した。この二人の心中は劇化し大坂で上演され、当時非常に人気を得た。これは心中のはじまりだという¹⁷。そして、元禄十六（一七〇三）年に、曾根崎の森で起こった徳兵衛とお初の心中は、近松門左衛門の最初の心中物『曾根崎心中』となった。『曾根崎心中』は元禄十六（一七〇三）年に初演されて、近松のいわゆる心中物としての第一作であった。この劇は空前の大当たりで、人の関心を多く引き寄せた。

その後、次々に心中物が上演されて、宝永、正徳年間に大坂で心中は絶頂に達した。宝永元（一七〇四）年に出た『心中大鑑』に「きのふも心中けふもまた」、宝永五（一七〇八）年に刊行した『美景蒔絵松』にも「あそこも心中ここも心中」が記されていて、当時心中のはやりは必ずしも過言ではないと言えよう¹⁸。元禄の終わりから宝永まで、近松の『心中天の網島』を境にして、上方の心中風潮が江戸へ伝われ、心中事件も相次いで起こし続き、幕府を非常に悩ませた。そのため、享保八（一七二三）年に、幕府は心中の禁令を出し、心中者の一方が生存した場合は極刑を受け、双方生存の場合は市民権を奪い、心中で死んでしまった遺体は家族に渡さず、一切の葬式を禁ずるなど、心中した人に対して過酷な処置を行っていたが、心中の風潮が止まらなかった¹⁹。

近松門左衛門が書いた心中物のはやりで、元禄時代に心中ブームが起きた。

¹⁶同前掲村松剛『死の日本文学史』p.220

¹⁷同前掲村松剛『死の日本文学史』p.220

¹⁸村松剛『死の日本文学史』p.220、藤野義雄『近松と最盛期の浄瑠璃』p.109を参照

¹⁹同前掲村松剛『死の日本文学史』p.221-222

一方、すでに述べたように、近松の作品は町人の生活や恋愛事を描いた点で非常に人気を得られた。その作品の中に書かれている心中は、当時人々の目を惹かれた。では、近松ほどのように心中のことを作品に応用したのか。以下、近松文学における主人公たちが心中した理由を見てみよう。

第二節 近松文学と心中

近松の心中物から見ると、心中の理由は大別にして三つあるという。それは恋愛、義理人情とお金である。例えば、恋愛関係に不安、強制に切られたこと、不義、または負債という理由で心中することが一番多いという²⁰。たとえば、『曾根崎心中』では、心中の理由はお金と名分破壊と深くかかわっている。主人公の徳兵衛は九平次にお金を貸し出したが、お金の返済を求めると、九平次に詐欺と叱られて公衆の前で散々に殴りつけられ、面目を失わせる。兄弟として信じていた九平次に裏切られて、お金がなくなったことで、身の潔白を証明するために死ぬ以外の手段がないと、徳兵衛は思ってしまった。そのために、お初と心中に赴く。

そして『生玉心中』では、同じお金と名誉破壊の理由で心中したことが書かれている。柏屋の遊女さがは、客に連れられ神社を廻り、天満天神の茶屋へ戻った。茶碗屋の嘉平次は、さがを店の外に誘い出し、遊び過ぎて金に困っていた。友人の長作に父の店の品物を売ってもらって何とかできると約束した。すると、長作が店に現れ、嘉平次に頼まれた品物の代金はすでに渡して、受け取りまで済んだと伝えた。それを聞いた嘉平次は金を渡せと長作に迫って、大喧嘩になった。結局、嘉平次は、脇差でさがを刺し、自分もさがの帯で首をくく

²⁰同前掲大原健士郎『心中考—愛と死の病理』 p.61-62

って死んだ。

宝永三（一七〇六）年に出来た『心中二枚絵草紙』では、冤罪は主人公たちが心中した理由である。新地天満屋のお島は、馴染客と芝居見物をした後、帰ろうとする途中、お島に想いを寄せる市郎右衛門に出会う。市郎右衛門は妬ましさのあまり、お島と喧嘩してしまった。一方、市郎右衛門の弟善次郎は父のお金を盗み、酒器の中へ隠し入れる。市郎右衛門は、酒を飲もうとお金が出てきたので驚き、これが天からの賜り物と思って懐中に押し込む。それを父に見つけられ、公衆の前で勘当されてしまう。誤解されて死を覚悟した市郎右衛門は、夜更けにお島と密かに会った。そこで二人は、数珠を一万遍繰り終わった時に、それぞれ別の場所で死ぬと約束した。最後にお島は天満屋で、市郎右衛門は長柄の堤で同時に命を絶った。

不義負債の理由で、心中で命を絶つのは以上述べたものだけでなく、『心中刃は氷の朔日』『心中天の網島』などにも見えている。『心中刃は氷の朔日』は、大坂の鍛冶屋の弟子平兵衛と蜷川新地の遊女小かんと的心中を脚色した作である。鍛冶屋大文字屋利右衛門の弟子平兵衛は、蜷川の新地平野屋の抱え女郎小かんと馴染みをかさね、その身請けの金につまったあげく、鍛冶屋に追い出された。一方、小か人も国許の播磨から乳兄弟が迎えにきて連れ帰ろうとする。自分たちの将来に絶望した二人は屋根伝いに人目を忍んで逃れ出、北野の藍畑へ行って心中した。

近松の最高傑作と言われる『心中天の網島』では、大坂天満の紙屋治兵衛と曾根崎新地の遊女小春の心中が書かれている。治兵衛と小春は深い仲になっていたが、治兵衛にはおさんという女房があり、二人の子までいる。そこで治兵衛と小春は死ぬ約束をしておき、その機会をうかがっている。それを予感したおさんは小春に手紙を書いて夫を思い切ってくれとたのむ。その後、小春が身請けされることを聞いたおさんは、小春が死を覚悟したと察し、夫に小春を請け出させようとする。それがうまくいかなかったので、失望した治兵衛と小春

は網島の大長寺で心中した。

以上は不義負債による心中である。そして、恋の破滅という理由で心中したこともある。『心中万年草』は、宝永七（一七一〇）年に、高野山女人堂で寺小姓成田久米之介と山麓紙谷の宿のお梅が心中したことに取材し、書きあげたものである。久米之介はお梅と密通し、女犯の罪で山に追放された。一方、お梅には結婚の話が進んでいた。ところが、お梅が久米之介に会いに行く時、両親と婚約者に見つけられた。両親の祝福を得ないお梅は、ついに久米之介と女人堂で心中を遂げたのである。

『心中万年草』と同じく、『心中宵庚申』の主人公たちも愛情破滅の理由で心中した。この作品は、享保七（一七二二）年の宵庚申の夜、大坂生玉馬場先の大仏勧進所で八百屋半兵衛と妻千代の心中を語っている。半兵衛の女房である千代は姑に嫌われ、半兵衛が留守中に離縁され実家へ帰る。半兵衛は、命を賭けて千代を守って、千代を家へ連れ帰る。しかし、姑は千代を家に入れることを承知しないので、養家と千代の実家の板挟みになった半兵衛は、ついに宵庚申の夜に千代と家を忍び出て、生玉の勧進所で心中を遂げた。

以上は近松の心中物に見られる心中の理由である。心中の定義から見れば、心中は男女が恋のために死に赴くことであるが、実はお金、名分破壊、冤罪、不義負債などの理由で心中したことも少なくない。これまで述べたことから分るように、近松は町人の生活上の悩みを男女の愛情と融合させ、それを作品に書き込んだ。このような作品は当時庶民の共感を呼び出せることも理解できよう。

実は近松文学が注目されるのは、その作品に表れている町人の葛藤と恋愛だけでなく、その作品に表れた独特な表現にも関連があると思う。以下、近松文学の特色について述べていきたい。

第三節 近松文学の特色

近世の日本は、貴族文化に溢れている中世から町人の世界に移り、それまでの劇と文学は、権力者やヒーローなどを主人公として作成されてきたが、近松門左衛門があえて周辺にいる男女を描いたり、身近な生活を書いたりして、演劇として観客の前に演出させる。

江戸時代は元禄頃になると、社会の勢力が武士から町人になり、それまでに支配者階級に属した文学も庶民の手に移され、庶民文学が開花したのである。その感情の解放とともに町人が活躍し、自然に人生を享受するほうに向けられ、その結果が身分差のない遊廓が繁盛し、遊廓の中で町人と遊女の実現できない悲恋が続々と起こしていた。近松門左衛門が、このような事実を劇化し、それを歌舞伎と浄瑠璃の舞台に登場させた後、歌舞伎と浄瑠璃をより盛んにさせた²¹。藤野義雄によると、当時心中が流行になった理由は、近松が曾根崎の森で起こった徳兵衛とお初の心中を改編し劇場で上演されたという²²。

心中が演劇として大衆に好まれるためには、必ず観客の同情や共感などを呼び出さなければならない。近松が、作品に社会からの脱落という事実を強化させ、周りとの衝突で観客に悲劇的な感動をさせたいという。藤野義雄によると、心中という人生の敗北と見られる行為のゆえに、観客の共感を得ることができるのであって、それが日常性を離れた音楽と人形によって表現されるため、抽象なイメージで人の心に強く迫ることができるという²³。本論で取り上げた近松の作品『曾根崎心中』は、以上述べたような意図で作られたものとも言える。

²¹木坂元子「道行研究—近松世話浄瑠璃における」(『日本文学』所収)(1956)日本文学協会 p.47

²²同前掲藤野義雄『近松と最盛期の浄瑠璃』 p.109

²³同前掲藤野義雄『近松と最盛期の浄瑠璃』 p.110

この作品の主人公たちが社会的な障害とぶつかり、最後に身が破滅する。このような運命に対して、観客は憐憫の感情を持っており、作者もこれを生かし、せめてその恋が成就できる心中を完成させたのである。

河竹繁俊は近世の日本社会について、次のように述べている。近世に入ると、中世においての貴族を中心とする世界から人間を解放し、情を持っている人としての自覚を生みながら、一方では経済の不均等や身分制度で人間を拘束する。恋愛は、頭を抑えられている若者達にとって、人間としての自覚をもたせることであった。そのため、浮き世に生活している人が、その愛と人間の尊さの作品世界を守りたい²⁴。これは近松の心中物が観客の同情を呼び出せる理由ではないか、と河竹繁俊が言う。

また、向井芳樹は近松文学の特徴について、次のように述べている。向井芳樹によると、近松門左衛門は、元禄・享保期の町人の苦悩と悲哀を克服するという方向ではなく、みずからその重荷を背負おうとする方向に展開していったことを物語っている。特に当時町人の生活の矛盾や葛藤などを悲劇として表現していることである。また、近松の心中物において、男がお金に関しての不如意が多くて、女が下級遊女であって、普段の生活から無力感しか持て得ないため、愛情を貫こうとするような心境で、最後に来世の浄土を祈る一蓮托生の願望で心中した。このような場面を描写するのも近松の芸術観の一つのポイントであるという²⁵。

そして、近松の心中物の構造から見ると、上巻は心中の誘因を描き、中巻は死に至る動機を取り上げ、下巻は道行から心中までの過程を語っている。これは近松の心中物のほとんどの共通点だと言われている。荒木繁によると、近松

²⁴河竹繁俊『近松門左衛門』（1994）吉川弘文館 p.81-82

²⁵向井芳樹「今宮の心中論—近松世話浄りの展開」（『日本文学』所収）（1956）日本文学協会 p.421

浄瑠璃の偉大さは、町人階級の中で恋愛の自由をうたい上げている点にある。彼らは恋愛をつらぬいて没落してゆく瞬間に、もっとも美しくなり、人間的であり、生の高揚をしめすという²⁶。一方、原道生は、近松の作品に、「恋」そのものを他から切り離し、神化させたのではない。恋が、主従・親子・妻子などの関係と齟齬する姿がよく取り上げられている点が重視されているという²⁷。

実は、近松の作品にもっとも有名なのは「虚実皮膜論」である。「虚実皮膜論」とは、近松門左衛門の演劇理論で、すばらしい演劇を作るのに、嘘と実の間にこそ、素敵などころがあるという論理である。近松の作品の中で応用された「虚実皮膜論」は、特に人の目に入っている。劇の構成では、フィクションと事実との間の微妙なところがあり、写実だけではなく、虚構があることによって芸の真実が増すというものである。芸の面白さは虚と実との皮膜にあると言われる。このような表現は、『曾根崎心中』にも見られている。

たとえば、『曾根崎心中』では、主人公のお初は十八、九の少女である。しかし当時各地で実際に起こった心中事件を収録されている『心中大鑑』によると、お初の本名が妙であり、年齢も二十一であるという。『心中大鑑』では、お初は「水上の夕べより、十年あまりのあたり女郎」と記されている。しかし、松崎仁によると、お初は元々は島原の遊女だったのが、「流れの身の行すゑ」（『心中大鑑』）に場末の色町に身を落とし、新地の遊女として活動して、そのことから考えて「十年あまり」は誇張であるという²⁸。以上のように、近松が厄年のことに合わせて、お初の年齢を変えたとも考えられよう。

²⁶荒木繁「近松の歴史的意義についての覚書」（『近松』所収）（1987）有精堂 p.51

²⁷原道生「近松世話浄瑠璃の評価の問題—松田修氏の論考に触れながら」（『日本文学』所収）（1963）日本文学協会 p.470-471

²⁸松崎仁「近松作品の真実と虚構—曾根崎心中」『国文学：解釈と鑑賞』（1970）至文堂 p.74

また、作品の上では、徳兵衛の継母が、平野屋の主人から二貫目の金を受け取ったが、徳兵衛は継母から取り返したお金を友人の九平次に騙し取られたので、お初と死を決意したと書かれている。しかし、『心中大鑑』によれば、実際に、徳兵衛には平野屋主人の養女と縁談があり、江戸の支店を経営させ、お初には身請けされた話があったので、金のない二人はついに心中してしまったという。

以上のように、敵役の九平次は近松が創作したものとも言える。松崎仁は、近松が九平次を通して、町人社会の現実の中から、金に関しての悪を描き出し、九平次に重要な役割を与えたと指摘している²⁹。たとえば、『曾根崎心中』では、生玉の場に徳兵衛は九平次から貸したお金を取り返したいが、九平次は徳兵衛を公衆の前で恥をかかってしまった。そして、天満屋の場において、九平次の悪口によって、お初と徳兵衛が死の決意を覚悟したので、九平次は二人を心中に導く決定的な役割とも言えよう。以上のように、近松は劇的な効果を求めるために、九平次という敵役を作ったとも考えられよう。

また、お初と徳兵衛のイメージについて、松崎仁は次のように述べている。松崎仁によると、徳兵衛は『心中大鑑』では「爪はづれ尋常にて、醬油売にはおしき男」、「伽羅の油江戸もとゆひ、月代は三日剃して、人あいのある鬘」を見せる洒落男となって、これは浮世草子の色男役にありがちな人物であるが、当時遊女と心中する男もこのような人が多いという³⁰。この点については、近松が書いた「春の重ねし雛男。一つなる口もゝの酒。柳の髪もとく／＼と呼ばれて粹の名取川」という徳兵衛とはずれない。そして、『曾根崎心中』に書かれているお初は、『心中大鑑』とはあまり変わっていない。『心中大鑑』では、お初は、人生の裏も表もよく知っていて、徳兵衛には、主人に対する首尾を考

²⁹同前掲松崎仁「近松作品の真実と虚構—曾根崎心中」 p.75

³⁰同前掲松崎仁「近松作品の真実と虚構—曾根崎心中」 p.74

え、金の無理をせぬように上手に遊んで「長う細うかはいがつてくださんせ」と忠告する女であると書かれている³¹。以上述べたことから分るように、『曾根崎心中』には虚構のところもあるが、類似している部分も見られる。

以上のように、虚実皮膜論は『曾根崎心中』だけでなく、前節に述べた近松の『心中宵庚申』にも、このような芸術論が見られている。『心中宵庚申』では、半兵衛と千代の心中の時間については、土田衛は二人の墓石から見れば、享保七年が実説であるという。また、江戸中期の浄瑠璃作家である紀海音の『心中二ツ腹帯』においても、この事件を宵庚申の夜と設定したという³²。以上のように、『心中宵庚申』に書かれている半兵衛と千代が心中した時間は異議がないと思われる。

ところが、千代の身分については、『心中宵庚申』と実説とは違う部分がある。『心中宵庚申』では、千代は山城上田村の農民・平右衛門の妹であると書かれているが、過去帳では、千代は平右衛門の妹娘と記されている。また、千代の享年が実説では二十四であるが、『心中宵庚申』では二十七と異なっている。さらに、土田衛は二人が夫婦心中であるかどうかに関して、次のような疑問を取り出した。半兵衛と千代の墓石に「一蓮托生」とあって、心中したことは問題ないが、「離身童子」という子供の戒名も墓石の上に並べられているので、実は夫婦心中ではなく、三人をそろっての「一家心中」であったかもしれないと、土田衛が指摘した³³。

以上のように、近松が日常的な現実を徹底的に写すが、事実そのものは芸術ではない。彼は、真実の事件を脚色して、事実を離れて作品を作り出す。劇の世界では現実とは違って、大げさな物語が起き続けるが、単なるありえない嘘

³¹同前掲松崎仁「近松作品の真実と虚構—曾根崎心中」p.74

³²土田衛「近松作品の事実と虚構—心中宵庚申」『国文学：解釈と鑑賞』（1970）至文堂 p.100-p.101

³³同前掲土田衛「近松作品の事実と虚構—心中宵庚申」p.101

だけではない。その嘘の中には必ずある程度の真実が潜んでいる。藤野義雄は、近松の芸術論について、現実の世界と芸術の世界は次元を異にする別々の存在であることを明確にし、虚実相まって芸術的目的が達成されたと述べている³⁴。河竹繁俊にも指摘されたように、「虚にして虚にあらず、実にして実にあらず」(『難波土産』)³⁵というように、この虚構の真実は近松のもっとも有名な芸術論であるという³⁶。

そして、信多純一によると、近松の作品の根本原理は、情と義理の二つで、人間のあるがままの感情を作中に活かし、その上浄瑠璃を悲劇的なものとして成立させるという義理であるという³⁷。

以上は近松文学についての特色である。これまで述べたことから分るように、近松は義理人情や恋愛などの要素を作品の中に入れて、一般民衆の生活に寄り添って、多くの関心を引きつけた。このような表現を通して、近世の庶民社会を反映した。これこそ近松の作品が当時注目された理由ではないかと思う。以下、近世の日本社会に大きな影響を与えた『曾根崎心中』について論述していきたい。

第四節 『曾根崎心中』

『曾根崎心中』は元禄十六(一七〇三)年に、曾根崎村の露天神の森で心中した事件を題材にしている近松門左衛門の作品である。元禄十六(一七〇三)年に大坂の竹本座で人形浄瑠璃に改編し、上演された。後に歌舞伎の形式で、

³⁴同前掲藤野義雄『近松と最盛期の浄瑠璃』p.236

³⁵守随憲治訳注『近松世話物集』(1982)旺文社文庫 p.326

³⁶同前掲河竹繁俊『近松門左衛門』p.166

³⁷信多純一『近松の世界』(1991)平凡社 p.171

観客を魅了させ、当時大きなブームになった。では『曾根崎心中』はいったい何を語っているのでしょうか。

『曾根崎心中』は、醤油屋の手代である徳兵衛と天満屋の遊女お初が悲恋と名誉破滅のため、最後に一緒に命を絶つという悲しい物語である。作品の構成から見ると、上巻の「観音廻り」と「生玉の場」、中巻の「天満屋の場」、下巻の「心中の道行」からなっている。まず上巻の「観音廻り」から見てみよう。

「観音廻り」とは、三十三所の観音霊場を巡拝することである。『曾根崎心中』の「観音廻り」では、この作品の主人公お初が駕籠から登場し、当時大坂の有名な三十三所の霊場巡礼をする。お初は天満の大融寺をはじめ、最後に新御霊神社で終える。そして、「生玉の場」では、三十三所寺院の巡礼を終えたお初は、恋人の徳兵衛と偶然に生玉神社で再会して、徳兵衛が平野屋の主人に甥と結婚させることを聞いた。ところが、徳兵衛はその縁談を断った。縁談を断った徳兵衛に平野屋の主人は怒りだし、彼を大坂から追放され、その継母に渡したお金を返すこととなった。徳兵衛は継母からお金を取り返したが、友人の九平次にその金を貸してしまった。しかし、その後九平次は逆に徳兵衛を公衆の前で恥をかかせてしまった。そのため、徳兵衛は死によって自分の潔白を証明することを考え始めた。

中巻の「天満屋の場」では、死の覚悟を決めた徳兵衛が天満屋に行った。お初は徳兵衛がほかの人に見つからないように、彼を縁の下に隠した。そこへ九平次が客として訪れて、「これのはつが一客平野屋の徳兵衛めが。身が落した印判拾ひ。二貫目の偽手形でかたらふとしたれ共。理屈に詰まつてあげくには。死なずがひな目に合ふて一分は廃つた」という九平次の侮辱的な言葉と、「証拠なければ理も立たず。此上は徳様も死なねばならぬ品成が。死ぬる覚悟が聞きたい」「いつまで生きても同じこと。死んで恥をすゝがいで」 というお初の暗示的な言葉で、徳兵衛は死の決意を持っており、お初の足を取って自分の首を切る動作で、お初に死を表明した。

そして、最後の「道行」では、徳兵衛とお初は手を取り合い、曾根崎の森へ死に赴く。「此世のなごり。夜もなごり。死にに行く身をたとふればあだしが原の道の霜。一足つつ消えてゆく。夢の夢こそあはれな」という道行文のもとで、二人は恋の成就や来世への願望などを祈りながら、連理の木の下で覚悟を確かめ合う。最期に及んで徳兵衛はお初の命を奪うことに躊躇したが、お初が励まして、ついにお初の命を奪い、自らも命を絶った。

以上は『曾根崎心中』のあらすじである。この物語の背景は、京生まれ島原に育ち、のち大坂北の新地の天満屋で働いていた遊女お初が、大坂内本町の醤油商・平野屋の手代である徳兵衛と恋していたが、徳兵衛が平野屋主人の甥と夫婦にさせられて、お初もお客に身請けけられたので、二人は曾根崎へ行って、心中をとげたということである。

『曾根崎心中』では、一番人の目を引かれたのは、お初の観音廻りと最後の曾根崎森の道行であろう。観音廻りでは、お初は大坂三十三ヶ所の寺院、神社を巡って、観音に化身して、恋で徳兵衛を救済することが暗示されている。最後の道行では、徳兵衛とお初は、「此世のなごり。夜もなごり。死にに行く身をたとふればあだしが原の道の霜。一足つつに消えてゆく。夢の夢こそあはれなれ」という道行文のもとで、冥途への旅が始まる。そして最期に徳兵衛はお初の命を奪い、自らも命を絶った。この作品では、近松が二人の死を「取伝へ貴賤群集の廻向の種」、「未来成仏」と「恋の手本」と称し、来世での契りとする。

『曾根崎心中』に出ている観音廻りは、当時大坂の三十三ヶ所の寺院や神社を巡拝することである。『曾根崎心中』の最初に、お初が駕籠から出てきて、「十八九なるかほよ花」「今咲き出しの。初花に」というように、その年齢は容貌と名前を掛けている。そして三十三番の観音札所を巡礼する時、「卅三に御身を変へ色で。道引情で教へ。恋を菩提の橋となし。渡して救ふ観世音誓ひ

は。妙に有難し」というように、観音さまは、衆生を救うために身を変えて、人々を色で導き、情けで教え、恋を悟りの橋にしてあの世へ掛けて渡して下されることを示している。高島元洋によると、この観音廻りを通して、お初自身が観音になり、徳兵衛を恋で導き、救済するという³⁸。

そして「此世のなごり。夜もなごり。死にに行く身をたとふればあだしが原の道の霜。一足づつに消えてゆく」のくだりで、曾根崎森の道行がはじまる。

「あれ数ふれば暁の。七つの時が六つ鳴りて残る一つが今生の鐘の響きの聞納め」というように、「寂滅為樂」の鐘の音が響き、お初と徳兵衛は「神や仏にかけをきし現世の願を今こゝで。未来へ廻向し後の世もなをしも一つ蓮ぞやと」と、神仏に現世の願望を未来へ廻向して来世に一つの蓮で生まれると祈って、やっと曾根崎の森にたどり着いた。それから「二本の連理の木」という相生の二本の木の下で、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」という念仏の声の中で、徳兵衛がまずお初を刺し、自分ものどを切って心中した。

一見すると、徳兵衛とお初の悲恋がその心中の理由のように見えるが、実際にそうとは判断できない。森山重雄によれば、徳兵衛が死を決意したのは、九平次に貸した大事な金を返さないどころか、逆に偽判と贋手形の汚名をきせて、衆人のなかで辱めしその名誉を破壊したためであるという³⁹。つまり、徳兵衛は人の前で自分の面目を失ったので、死への決心をしてしまった。このように考えてみれば、徳兵衛は単にお初との恋が成就できないために心中を決意したのではなく、自らの名誉のほうにも汚点がつけられたので、死への意気が固められたとも考えられよう。

³⁸同前掲高島元洋「情による超越—他界から虚構へ」p.119

³⁹森山重雄「近松の方法—その町人倫理について」(『日本文学』所収)(1956)日本文学協会 p.836

第三章 『曾根崎心中』に見られる仏教思想

前章では、『曾根崎心中』について述べた。『曾根崎心中』は心中物の嚆矢として、江戸時代の心中の流行を起こした。この作品は名誉を守るために死に赴くことだけでなく、町人がその固定されていた身分制度から逃れられないために、恋を通して自分を昇華することを願っていることも反映されている。

実は男女の恋愛だけでなく、この作品に現われている仏教思想はかなり目立っている。村松剛は『死の日本文学史』、石田瑞麿は『日本古典文学と仏教』にも指摘したように、『曾根崎心中』をはじめ、すべての心中物は仏教思想、特に浄土信仰に基づいて作られており、仏教信仰に支えられてきたという⁴⁰。徐翔生も、徳兵衛が観音菩薩の化身となったお初に救われることで、近松がこの二人の心中を「未来成仏疑ひなき恋の。手本となりにけり」と語っているように、その恋を成就させた心中に仏教的価値を与えようとしたと述べている⁴¹。

実は『曾根崎心中』には、一番最初からの観音廻りから、最後の心中への道行まで、多くの仏教思想が示されている。では、『曾根崎心中』にいったいどんな仏教思想が示されているのであろうか。本章では、『曾根崎心中』に見られる仏教思想について述べたいと思う。まず、この作品の最初の観音廻りから述べてみよう。

⁴⁰同前掲村松剛『死の日本文学史』p.228、石田瑞麿『日本古典文学と仏教』p.374

⁴¹同前掲徐翔生「曾根崎心中に見られる仏教」p.29

第一節 お初の観音廻り

すでに述べたように、『曾根崎心中』の初めに、お初の大坂の三十三所の寺院を巡礼する「観音廻り」のことが描かれている。観音廻りとは、観音さまを始めとした霊社・霊寺めぐりの道行で、中世から近世の初期にかけて、民衆の信仰心に訴える修行である。作中にはまず「げにや安楽世界より。今此娑婆に示現して」と、この世を娑婆にたとえ、観音さまが人間を救うため、三十三の寺院で祀られていることが書かれている。

お初は駕籠から登場し、太融寺をはじめ、長福寺、神明宮、法住寺、法界寺、大鏡寺、超泉寺、善導寺、栗東寺、玉造稲荷神社、興徳寺、慶伝寺、遍明院、長安寺、誓安寺、和勝院、重願寺、本誓寺、菩提寺、六時堂、経堂、金堂、講堂、万灯院、新清水寺、心光寺、大覚寺、金台寺、大蓮寺、三津寺、大福院、善龍寺、新御霊神社の順で巡礼し、最後に「恋を菩提の橋となし。渡して救ふ観世音誓ひは。妙に有難し」というように、観音が人間を世俗から救うため、この世に御身を変えて、色の道で人々を極楽世界に導くという。佐藤彰によると、お初の観音廻りは、ただ大坂三十三所の寺院を巡拝したというのではなく、此岸から彼岸への仮設された道行をたどったというところに重要な意味があるという⁴²。

以上のように、このくだりでは、たくさんの仏教思想が見られている。まず、われわれが生活しているこの世は阿弥陀仏が衆生を教化するという娑婆の世界にたとえ、煩惱があふれている現世であるという。そして、お初が三十三所の寺院を巡礼する時、「こゝにかうづの遍明院。菩提の種や上寺町の」と、菩提の種などの仏教用語が続々と出てくる。菩提とは、仏の悟りの境地、極楽浄

⁴²佐藤彰「曾根崎心中における表現の世界—「観音めぐり」からみた構造」(『日本文学 30 卷 7 号』所収) (1981) 日本文学協会 p.48-49

土に往生して成仏することである。ここでは、徳兵衛とお初の未来成仏の願いとつながっていると思われる。そして、観音廻りで一番目立つのは、「卅三に御身を変へ色で。道引情で教へ。恋を菩提の橋となし。渡して救ふ観世音誓ひは。妙に有難し」ということである。ここで、観音さまが人間に化身して恋を菩提で人を救済するという観音信仰が見られる。では、観音信仰とは何であろうか。

第二節 観音廻りと観音信仰

観音信仰の歴史を遡ると、インドの観音信仰まで考察しなければならない。インドの観音信仰の成り立ちは、一世紀の頃だという。観音は元々インドの女神であり、水神、または大地の女神として崇敬されている。五世紀の頃、観音信仰はインドから中国に伝入した。先祖追善や現世利益の信仰として親しまれ、中国の人々信仰の中心を占めるようになった。

『法華経』の「観世音菩薩普門品第二十五」に、観音は種々の形を以て、「自在神力有って、娑婆世界に遊ぶ」⁴³、「其の名を称するが故に即ち解脱することを得ん」⁴⁴という点がその特徴として説かれている。また、「観世音菩薩の名を持つこと有らんは者は、設い大火に入るとも、火も焼くこと能わじ。是の菩薩の威神力に由るが故に。若し大水の漂わす所と為らんに、其の名号を称せば、即ち浅き処を得ん」⁴⁵とあり、観音菩薩の名号を称えさえすれば、誰でもたちどころに火難や水難から救われると説かれて、庶民に対して理解しやすい

⁴³植木雅俊訳『法華経下』（2010）岩波書店 p.504

⁴⁴同前掲植木雅俊『法華経下』 p.496

⁴⁵同前掲植木雅俊『法華経下』 p.492

現世利益が非常に強調されている。

日本では、観音信仰は中国・朝鮮から飛鳥時代に伝来したと言われている。『日本書紀』に、天武天皇朱鳥元（六八六）年七月に「是の月に、諸王臣等、天皇の為に、観世音像を造れり。即ち観世音經を大官大寺に説かしむ」⁴⁶と、観世音への信仰が見られる。そして、持統天皇の時、「金銅の阿彌陀像、金銅の観世音菩薩像・大勢至菩薩像、各一軀、綵帛・錦・綾を獻る」⁴⁷というように、新羅から持統天皇に送ってきた観音像に関する記事も記録されている。伝来した観音信仰は縄文時代以来の大地母神の信仰と融合し、日本土着の神として示現されているという。当時の観音信仰は、鎮護国家から日常的な至福まで、現世利益が中心であった。平安時代の十世紀の時から浄土信仰の発達を背景に観音信仰も来世的色彩を帯びるようになった⁴⁸。

速水侑によると、観音信仰は、鎮護国家的な機能を期待するところから飛鳥時代から律令制度を奉行する日本に受容されたという⁴⁹。平安時代に入ると、個人の除病・延命・得福などの現世利益のために信仰されるようになり、貴族の観音参詣が盛行し、摂関期には民衆の参詣も次第に増えていった。そして、院政期になって、観音を祀るところが民衆の集まる場となり、やがて観音霊場の誕生へとつながるようになった。徳治元（一三〇六）年に出来た『とはずがたり』に、ある修行者が「武蔵の国へ歸りて、浅草と申堂あり。十一面観音のをはします。靈仏と申もゆかしくて参る」⁵⁰と記載されているから、中世には

⁴⁶坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注日本古典文学大系 68『日本書紀下』（1978）岩波書店 p.480

⁴⁷同前掲坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋『日本書紀下』 p.496

⁴⁸沼義昭「救済者観音の構造—その秘儀をめぐって」（『立正大学文学部論叢 053 号』所収）（1975）立正大学 p.123

⁴⁹速水侑『観音信仰』（2007）雄山閣 p.145-146

⁵⁰三角洋一校注新日本古典文学大系 50『とはずがたり・たまきはる』（1999）岩波書店 p.186

すでに観音霊場があったことがわかる。

『曾根崎心中』に描かれている観音廻りは、応保一(一一六一)年の僧覚忠までに遡ることができよう。観世音の三十三身にちなんで畿内周辺の代表的観音霊場三十三所を巡る西国巡礼である。十三世紀には、坂東三十三所、十五世紀には、秩父三十三所が成立し、巡礼が大衆化された。荒井貢次郎によると、文化一〇(一八一三)年に出来た『浅草寺志』では、当時、浅草寺伝存の巡礼者の奉納額、供養塔に宝暦、天明、寛政、享和、文化などの年号が記されている。このことから当時観音廻りが存在していることが立証されるであろう⁵¹。

実は中世の文学作品『源平盛衰記』には、観音信仰のことがすでに見られている。髑髏尼という女性が観音巡礼をすることによって、夫の滅罪・若君の成仏・自分の救済を求めていることが描かれている。また、『今昔物語集』の巻十六「仕観音人行竜宮得富語第十五」に、「此ノ男毎月ノ十八日ニ持齋シテ、殊ニ観音ニ仕ケリ。亦、其ノ日、百ノ寺ニ詣デ、仏ヲ礼シ奉ケリ」⁵²と記されており、ある男が毎月の十八日に百の寺に観音を参拝しているように、観音巡りが平安時代からすでにあつたことを示している。

江戸時代に観音廻りが流行っていた理由について、次のような解釈がある。後小路薫は、元禄期の経済的な不況にもかかわらず、一般庶民の中に享樂的風潮が浸透したこと、商業の活発化に伴って、広い地域が認識されるようになった。このような時代背景のもとで、観音廻りがよりいっそう盛んになったという⁵³。観音廻りの流行によって、江戸時代に観音信仰が盛んでいたとも言えよう。

⁵¹荒井貢次郎「観音信仰と江戸系流通・芸能民一金竜山浅草寺等関係史料による」(『印度学仏教学研究 35 卷 1 号』所収) (1986-1987) 日本印度学仏教学会 p.273-274

⁵²馬淵和夫・国東文麿・今野達『今昔物語集二』(1992) 小学館 p.231

⁵³後小路薫「松誉巖的著述攷一西国洛陽三十三所の観音霊験記を中心に」(『大谷学報 66 卷 2 号』所収) (1986) 大谷学会 p.19

『曾根崎心中』では、観音廻りの最後のくだりで、観音が「卅三に御身を変へ色で。道引情で教へ」と、観音が変身し色で人を導くことが書かれている。高島元洋はこの観音化身のくだりについて、次のように述べている。高島元洋によると、徳兵衛は観音となったお初に救われたという。つまり、実際に遊女であるお初は観音廻りを通して、「恋を菩提の橋となし。渡して救ふ観世音」というように、観音の化身となり、徳兵衛を救済するという⁵⁴。以上述べたことから、『曾根崎心中』には仏教の観音信仰が溢れていることが窺えよう。

第三節 心中の道行

『曾根崎心中』では、以上述べた「観音廻り」だけでなく、心中の道行にも多くの仏教思想が含まれている。心中の道行は、徳兵衛とお初が曾根崎の森へ行って、心中に向かうことである。前章にも述べたが、徳兵衛は、天満屋で九平次の侮辱的な言葉と、お初の「死ぬる覚悟が聞たい」「死んで恥をすゝがいでは」という暗示的な言葉で、死の決意も持っており、お初と一緒に死に赴く。この二人は真夜中、「此世のなごり。夜もなごり。死にに行く身をたとふればあだしが原の道の霜。一足づつに消えてゆく。夢の夢こそあはれなれ」と、手を取り合い、曾根崎の森へ赴き、「あれ数ふれば暁の。七つの時が六つ鳴りて残る一つが今生の鐘の響きの聞納め。寂滅為楽と響くなり」という鐘の音のもとで、冥途への旅が始まった。そして、近松はこの二人を女夫星、連理の木にたとえる。この二人は最期に及んで「南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏」と念仏しながら、徳兵衛が短刀でお初の命を奪って、自らも命を絶った。その後、近松

⁵⁴同前掲高島元洋「情による超越—他界から虚構へ」p.119

は二人の死を、「未来成仏疑ひなき恋の。手本となりにけり」と来世での契りとして結末する。

以上のように、『曾根崎心中』における道行のくだりの最初から、「あれ数ふれば暁の。七つの時が六つ鳴りて残る一つが今生の。鐘の響きの聞納め。寂滅為楽と響くなり。鐘ばかりかは」と、二人の心中を暗示している鐘の音が響きはじまった。「寂滅為楽」という語は、『涅槃経』という仏教の経典から出てきた言葉で、この迷いの世界から離れて、心が安らかな煩悩の消え去った究極的な悟りの境地に到達した意味であるという。心中道行の「鐘の響きの聞納め。寂滅為楽と響くなり」という言葉から、仏教の説く「寂滅為楽」の境界に連想することができよう。

そして、徳兵衛とお初が自分の厄年を嘆ずるところに、「神や仏にかけをきし現世の願を今こゝで。未来へ廻向し後の世もなをしも一つ蓮ぞやと」と、二人が現世の願望を神仏に祈って、来世へ廻向できるように、一つの蓮になりたいという「一蓮托生」のことが描かれている。一蓮托生とは、極楽浄土で同じ蓮の上に生まれることである。つまり、死後極楽浄土で再会し、一緒に暮らそうという願いがあり、救いがあるということである。ここで、徳兵衛とお初が死後一つ蓮の台に生まれて、一緒に暮らそうという願いも察知できよう。

そして、お初は「つまぐる数珠の百人に涙の玉の。数添ひて尽きせぬ」と、仏教で俗世の煩悩を暗示している百人の数珠を数えながら、涙がこぼれてきて、何が数珠か何が涙か交えて数えきれなくなったという心境で死に赴く。その後、お初は雷の光を見て、「今のは何といふものやらん」と聞き、徳兵衛が「あれこそは人魂よ。こよひ死するは我のみとこそ思ひしに。先立つ人も有しよな。たれにもせよ死出の山の伴ひぞや。南無阿弥陀仏。／＼」と答えた。徳兵衛が「南無阿弥陀仏」と答えたことから、二人が念仏往生の願いが見られる。そし

て、二人は涙を流して、松棕櫚の相生を「此二本の連理の木に体をきつと結はひ付け」と連理の契りと、来世への願望を誓いた。

心中道行の最後に、徳兵衛とお初は「南無阿弥陀仏」を唱えながら、徳兵衛がお初の命を自分の手で奪うことに躊躇する。そして、お初が「はやく、はやく」と励まして、徳兵衛はついに短刀でお初の命を奪い、終りに返す刃で自らも命を絶った。そして、二人は「断末魔の四苦八苦」という死への苦痛を経た後、息を切ってしまった。断末魔とは、梵語で人間が死の前に感じた苦しみである。四苦八苦も同じ仏教用語であるが、四苦は生・老・病・死のことを示しているが、愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五陰盛苦と合わせて八苦になったという。そして二人の恋が、「取伝へ貴賤群集の廻向の種。未来成仏疑ひなき恋の。手本となりにけり」という美しい結果となり、近松はその恋を成就させたのである。

以上は『曾根崎心中』に現れた仏教思想である。しかし以上述べた仏教思想は、本来の仏教思想と少しずれが出ているのではないかと思う。仏教では、この世に対する執着を持てば、死後極楽浄土に往生することはできない。たとえば、「一蓮托生」について、徐翔生は次のように述べている。徐翔生によると、『曾根崎心中』に見られる一蓮托生の思想に、現世利益が入っており、この世を「穢土」とする仏教思想に矛盾しているという⁵⁵。以上のように、『曾根崎心中』に現われた一蓮托生の思想は、元来の仏教思想と剥離している部分もあるが、仏教の影響を受けて生みだされたものとも考えられる。このような思想は、日本仏教の浄土思想にも深く関連があるとも言えよう。

⁵⁵同前掲徐翔生「曾根崎心中に見られる仏教」p.34

第四節 道行に見られる浄土思想

日本では、七世紀前半の飛鳥時代に浄土教が伝えられてから、浄土思想は日本で開花して、日本社会に深い影響を与えてきた。十二世紀の鎌倉時代になると、それまで貴族を対象とした仏教は、武士や庶民などを対象とした信仰の変革がおこる。当時、貴族による支配権力が武家による統治へと移り、仏教も貴族しか信仰できない宗教から大衆に伝播することを遂げた。平安時代末期になると、釈迦の死後一千年で、世間に悟りがなくなり、正しい行いもなくなっていくという末法思想が流行していたという。末法思想の盛行によって、人々が極楽浄土への往生を求めるようになり、浄土教は飛躍的に発展した。

当時、法然と親鸞が出てきた。法然は浄土宗の開祖とされ、「専修念仏」を提唱し、「南無阿弥陀仏」を唱えることによって、貴賤や男女の区別などがなく、極楽浄土へ往生することができることを主張している。法然の弟子である親鸞は、その教えをさらに発展させ、後に浄土真宗の宗祖となった。法然と親鸞が唱える浄土宗と浄土真宗は、鎌倉時代の時から日本社会に強い影響を与えてきた。

『曾根崎心中』では、お初が死の前に「南無阿弥陀仏」と唱える。お初が「南無阿弥陀仏」と唱えるのは、実は浄土思想であって、浄土教が説く念仏往生だと思われる。法然の『往生要集釈』には、「念仏を勧むることは、これ余の種々の妙行を遮するにはあらず。ただこれ男女・貴賤・行住坐臥を簡ばず、時処諸縁を論ぜず、これを修するに難からず、ないし、臨終に往生を願求するに、その便宜を得ること念仏にはしかざればなり」⁵⁶と記されている。法然が主張しているのは、人の善悪や罪などと構わなく、死ぬ前にただ口に「南無阿弥陀仏」を念じて、往生できるということである。以上のように、法然が説く念仏往生

⁵⁶大橋俊雄校注日本思想大系 10『法然・一遍』（1971）岩波書店 p.19

からすれば、たとえお初が身分の低い遊女であっても、死ぬ前に念仏を通して、「貴賤群集の廻向の種」となり、極楽浄土に往生できると考えられよう。

また、『選択本願念仏集』において、法然は「念仏行者をば観音・勢至、影と形との如く、暫くも捨離せず。余行はしからず。また念仏者は、命を捨て已つて後、決定して極楽世界に往生す。余行は不定なり。およそ五種の嘉誉を流し、二尊の影護を蒙る。これはこれ現益なり。また浄土に往生して、ないし成仏に成る。これはこれ当益なり」⁵⁷と述べている。つまり、念仏する者は、そばに観音さまがおられて、念仏を成就すれば、命終に臨んで必ず聖衆の来迎をえて極楽浄土への往生が決定し、成仏へと至るといふ。

そして、法然の遺文や法語を集録した『黒谷上人語燈録・和語灯録』にも、「平生ノ念仏臨終ノ念仏トテ。ナンノ替目カアラン」⁵⁸が述べられている。以上のように、法然が「南無阿弥陀仏」を唱えるだけで極楽浄土に往生できると主張している。その簡単な教義が、当時社会どん底の人たちにとって、実行しやすいので、浄土教はその時から日本で開花されたのである。

法然の専修念仏の教えを継承し、浄土真宗を創立したのは、親鸞であった。親鸞は「悪人正機論」を唱えている。悪人正機論とは、すべての衆生は、煩惱具足の凡夫たる悪人であって、自分が悪人であると目覚めさせられた者こそ、阿弥陀仏の救済の対象であることという。伊藤益によると、親鸞が、阿弥陀仏の本願のもとで衆生が救われるという法然の教説に内含されて、悪性を払拭しえない凡夫の救済を強調し、社会的な卑賤視の対象とされる人々さえも救われる可能性を模索することによって、法然の思想を徹底させたといふ⁵⁹。法然と

⁵⁷大橋俊雄校注『選択本願念仏集』（1999）岩波文庫 p.138-139

⁵⁸了恵編・西村九郎右衛門校注『黒谷上人語燈録・和語灯録下』（1881）護法館 p.5

⁵⁹伊藤益『日本人の愛一悲憐の思想』（2000）北樹出版 p.196

親鸞によって、浄土思想が日本でより盛んでいた。

では、親鸞が指している救済できる悪人とは、一体どのような人間であろうか。伊藤益はこのことについて、以下のように述べている。

親鸞の言う「悪人」とは、自己存在に本質的に纏綿する悪性に気づいている人間、すなわち自身が悪人以外の何ものでもないことを自覚している者であり、「善人」とは、そうした気づき・自覚をもたない人間である。悪性の自覚者たる「悪人」は、その自覚のゆえに、自身の力に頼ることができない。それゆえ、彼は、己れのいっさいのはからいを振り捨てて、すべてを弥陀に委ねるであろう。ところが、「悪性」を自覚しえない「善人」は、己れのはからいによって開悟の境位に立とうとするから、基本的に弥陀の本願と無縁であるほかはない⁶⁰。

以上のように、親鸞は善人という者はこの世には存在しえないことを主張した。親鸞は、衆庶の肉食・妻帯を容認し、みずからもまたそれらを実践する。生きるためには「食」を得ざるをえず、その生を後世にまで持続させるには男女の媾合が不可欠であることを知るために、それらを現実において不可避の行為と見なした。

『曾根崎心中』では、お初が遊女の身分で、身に携われている「罪」の多いものと言わなければならない。徳兵衛は醤油屋の手代であるが、生存するためにさまざまな「悪」を犯したことも言うまでもない。このことは徳兵衛の死の前の反省からも理解できよう。たとえば、心中する前に、徳兵衛は「我幼少にてまことの父母に離れ。叔父といひ親方の苦勞となりて人となり。恩も送らず此まゝに。亡き跡までもとやかくと。御難儀かけんもつたいなや。罪を許して

⁶⁰同前掲伊藤益『日本人の愛—悲憐の思想』p.202

下され」と言い、平野屋の主人である叔父に養育の恩を返されず、死に行くことが「罪」だと後悔している。しかし親鸞の悪人正機の思想からすれば、それこそが西方極楽浄土に往生できる理由であろう。このように考えてみれば、徳兵衛とお初が「未来成仏疑ひなき恋の。手本となりにけり」と、未来成仏できるのは、以上述べた法然と親鸞の思想にも深くかかわっている。



第四章 『曾根崎心中』における救済

前章では、『曾根崎心中』に見られる仏教思想について述べた。前章で述べたことから分るように、『曾根崎心中』は日本の観音信仰と浄土教の浄土思想と深くかかわっている。一方、この作品においては遊女思想、また女性成仏などの救済思想も見られている。では、『曾根崎心中』では、いったいどのような救済思想が含まれているのであろうか。本章では、『曾根崎心中』に見られる仏教思想を中心に、この作品における救済の思想を深く論じてみたいと思う。

第一節 遊女思想

前章にも述べたが、お初は天満屋の遊女である。お初の身分が遊女であるため、まず遊女思想や遊女の信仰などから検討しなければならない。以下、お初が観音廻りにおいて遊女思想から述べてみよう。

佐伯順子は、遊女の役割について、次のように述べている。佐伯順子は、遊女が俗なるものの領域へおとしめられてしまったかにみえる「性」を「聖なるもの」として生き、神々と共に遊んだ女性たちであったと述べている。つまり、神と性を交わすことが身分の高い女性に任せ、神に仕える巫女の一種であった。巫女はもとより神の意志を伝えるものであるが、後に性を通して人を浄化するようになった。しかしその後生活のために、遊女にならなければならないと転じていたという⁶¹。

大江匡房の『遊女記』では、平安時代に江口、神崎、蟹島などの遊里が繁栄

⁶¹佐伯順子『遊女の文化史』（1987）中央公論社 p.4

していた様子およびそこに暮らす遊女の有様が記されている。この本では、江口の遊女は「観音を祖と為す」⁶²とある。また、江口の遊女小観音は、藤原道長の寵愛を蒙った遊女で、平安時代にはすでに伝説的存在となり、江口の遊女連からは神格が与えられていたという。そのために、江口の遊女が祖として仰いだ観音は、『観音経』の観音ではなく、遊女の観音であったと言われている⁶³。

また、滝川政次郎によると、生駒山の西麓に江口の遊女のために築かれた「君塚」というものがある。油屋の娘お染と丁稚の久松、お光との三角関係を描いている『新版歌祭文』にある野崎村の段の名曲によって、野崎観音の名はあまねく天下に知られているが、野崎観音が江口の遊女の遺跡であるという⁶⁴。野崎観音というのは、大坂府大東市にある慈眼寺で、本尊は十一面観音である。平安中期一条天皇の頃、江口の遊女が寺堂を再建し、永禄八(一五六五)年の兵火によって全焼した。元和年間僧の青巖が復興してから、大坂商人の絶大な信仰を得て、大坂から野崎参りと称して参詣者が多いという。

江口の遊女の伝説については、『新古今和歌集』の巻第十「羈旅歌」にも記されている。「天王寺へ詣で侍りけるに、にはかに雨の降りければ、江口に宿を借りけるに、貸し侍らざりければ、よみ侍りける」⁶⁵とあるように、西行が江口の里で宿を乞ふと、その家から妙の君という遊女が現われ、ここは僧の泊まる場所ではないと断って、西行と「世の中をいとふまでこそ難からめ仮の宿をも惜しむ君かな」⁶⁶、「世をいとふ人とし聞けば仮の宿に心とむなと思ふばかりぞ」⁶⁷という和歌の贈答を詠んだ。妙の君はのちに寺を建て、死ぬときは

⁶²滝川政次郎『遊行女婦・遊女・傀儡女』(1965) 至文堂 p.106- 107

⁶³同前掲滝川政次郎『遊行女婦・遊女・傀儡女』 p.106- 107

⁶⁴同前掲滝川政次郎『遊行女婦・遊女・傀儡女』 p.105

⁶⁵峯村文人校注『新古今和歌集』(1992) 小学館 p.305

⁶⁶同前掲峯村文人『新古今和歌集』 p.305

⁶⁷同前掲峯村文人『新古今和歌集』 p.305

普賢菩薩の姿になって天に昇ったという⁶⁸。以上のように、この物語では、遊女である妙の君は仏さまとかかわっていることが知られよう。

そして、建長二（一二五〇）年、または弘安十（一二八七）年に成立した『撰集抄』では、神仏の靈驗譚・寺院の縁起譚・高僧譚・往生譚・発心遁世譚などが載せられている。『撰集抄』では、平安中期の上人である性空が遊女の長を訪ねるとき、長にお酒を勧められ、「目ヲフサキ心ヲシヅメテ。觀念ヲシタマフ時ニ。端巖柔和ノ生身ノ普賢。白象ニ乗給ヒテ」⁶⁹と書かれているように、目を開けると長の姿が現れたが、目を閉じれば白象に乗っている普賢菩薩の様子を示しているということが記されている。

遊女が成仏することは、『古事談』などにも出ている。『古事談』では、性空が目を閉じて合掌した時、遊女の長者は「普賢の兒を応現し、六牙の白象に乗り、眉間の光を出だして、道俗の人を照ら」⁷⁰す姿で現わした。しかし、性空が目を開ける時、遊女の長者はまた元の様子に戻ったという。以上のように、『撰集抄』と『古事談』に書かれている性空上人と遊女成仏のことは、ほぼ同じである。美術史学者小林忠は、遊女が詩歌や舞踊などの才能を持っている女こそ、成仏の契機となるのではないかと主張した⁷¹。

実は江戸時代には、遊女で仏さまを表現することは少なくない。程茜は、江戸時代の浮世絵師の北尾重政の見立絵「見立普賢菩薩」をめぐって、次のように述べている。程茜によれば、「見立普賢菩薩」の中の女性は、江戸時代の遊女の服装を着たという⁷²。そして、江戸庶民にとって、高位の遊女が高嶺の花

⁶⁸西野春雄校注新日本古典文学大系 57『謡曲百番』（1998）岩波書店 p.372

⁶⁹圓位「撰集抄九卷」『撰集抄発心集・宝物集』（1983）名著普及会 p.93-94

⁷⁰川端善明・荒木浩校注新日本古典文学大系 41『古事談・続古事談』（2005）岩波書店 p.360

⁷¹小林忠『江戸の画家たち』（1987）ペリかん社 p.90

⁷²程茜「見立絵から見られる「聖」と「俗」―「遊女即菩薩」をめぐって」（『年報日本思想史』所収）（2014）日本思想史研究会 p.1

であるから、菩薩とほぼ同じような存在で、庶民が絵師の手を借り、菩薩を遊女に化身させ、自分のものにもしようという⁷³。

一九三〇年に出版した『尼崎志』では、尼崎市域の寺院・神社・神道・仏教会・キリスト教などのことが記されている。そして「尼崎城」「尼崎魚市」の各項目において、それぞれの由来・沿革などが詳しく記述されている。『尼崎志』では、如来院には投身自殺した五人の遊女の遺髪なるものが保存されていて、遊女の死体が上がったという洵上橋の橋杭で刻んだ観音の像を安置していると記されている。

以上で述べたことから見ると、遊女は仏さまと深くかかわっていることが分る。前章にも述べたが、高島元洋によれば、『曾根崎心中』ではお初が観音の化身だという。つまり、遊女であるお初は観音廻りを通して、観世音の化身となり、徳兵衛を救済するという⁷⁴。また、濱中修は遊女の救済について次のように述べている。濱中修は、「美人は多くの男の懸念を受けている。その苦を解消するために肌を許すことは滅罪の菩薩行である。これは遊女の所業の巧みな宗教的正当化にも通じる」⁷⁵という。つまり、遊女は多くの男の感情を答えられない罪を解決するために、肉体関係が必要である。その肉体関係を通して、遊女自身の罪が消滅し、男も同じ救済することができるという。

第二節 女性成仏

『日本女性史』では、女性が宗教上の位置が次のように述べられている。「古

⁷³同前掲程茜「見立絵から見られる「聖」と「俗」―「遊女即菩薩」をめぐる」p.4

⁷⁴同前掲高島元洋「情による超越―他界から虚構へ」p.119

⁷⁵濱中修「御伽草子「和泉式部」「小式部」論」(『国文学：解釈と鑑賞』所収)(1995)至文堂 p.123

代末期から中世にかけて、女人禁制や女性の宗教への参加を忌避する理由は様々語られたが、特に強調されたのが、女性が生まれながらに罪業深重と見る蔑視的な罪業観と、性を穢れとしてとらえる不浄観である。(中略) 仏典に書かれた教理が広く民衆の布教に影響を与えるようになると、仏典に内包していた女性蔑視観が、現実には女性を呪縛していった⁷⁶。そして、勝浦令子によれば、仏教では、女性が欺・怠・瞋・恨・怨という五障を持っているので、死後成仏できないという⁷⁷。以上述べたことから見ると、女性が蔑視されて、女性が成仏できないものと考えられている。ところが、前節に述べた遊女の思想から見ると、女性は仏さまとまったく関係がないとは言えない。以下、女性成仏の例を述べたいと思う。

女性成仏の元祖といえば、『法華経』の「提婆達多品」に記されている竜女が成仏することを述べなければならない。『法華経』によると、沙伽羅竜王の娘である竜女が八歳の時、文殊師利菩薩の説法を聞き、即座に菩提心を発し、釈迦仏に如意宝珠を奉って成仏したという。これは、女性の成仏が初めて現れたもので、また長い修行を経ずに速やかに得道する即身成仏のことを示されている。

女性成仏は『法華経』だけでなく、『観無量寿経』にも見えている。『観無量寿経』では、仏さまが女人のために説法することも記されている。韋提希夫人は、古代インドのマガダ国の頻婆娑羅王の妃である。息子の阿闍世王子のクーデターによって頻婆娑羅王が幽閉されると、韋提希夫人は密かに王に食べ物をあげた。それを知った阿闍世王子が怒って、頻婆娑羅王と同じように韋提希夫人を牢に幽閉させた。閉じ込められた韋提希夫人は、耆闍崛山のほうに向かい、釈迦仏に礼拝した。これを知った釈迦仏は、韋提希夫人に十方世界の浄土

⁷⁶野村育世『日本女性史2 中世』(1990) 東京大学出版会 p.71-72

⁷⁷同前掲勝浦令子「女性と仏教」p.385

を示現し、阿弥陀仏と極楽浄土を説いた。その後、韋提希夫人は釈迦仏の導きを通して、いちずに浄土に願った。韋提希夫人が最後に成仏したかどうかは明確に示されていないが、釈迦仏が女人のために身を現われて仏法を説くことはかなりまれなことだという⁷⁸。

そして『平家物語』では、女性成仏のことも書かれている。平清盛の娘建礼門院は、高倉天皇の中宮で、安徳天皇の母である。平氏一門が滅亡した後、生き残り京へ送還されて出家し、大原の寂光院で安徳天皇とその一門の菩提を弔った。建礼門院が最期を迎える時、仏像の御手に五色の糸を掛けて、「南無西方極楽世界教主弥陀如来、かならず引摂し給へ」⁷⁹と唱えた。やがて念仏の声も弱々しくなり、西の空に紫雲がたなびき、すばらしい香りが満ち溢れ、また妙なる音楽が流れた。『平家物語』では、「遂に彼人とは童女が正覚の跡を追ひ、韋提希夫人の如に、みな往生の素懐をとげけるとぞ聞えし」⁸⁰と、建礼門院の往生を童女と韋提希夫人の往生にたとえ、正覚を遂げたと記されている。

第三節 一蓮托生と未来成仏

以上、『法華経』『観無量寿経』と『平家物語』に書かれている女性成仏のことについて述べてきた。これまで述べたことから分るように、仏教の教典および日本文学では、女性成仏のことはまったくないとは言えない。『曾根崎心中』では、お初と徳兵衛が来世同じはちすの台に生まれ変わり、恋の手本になることが説かれている。では、性別のことを除いて、恋のために心中したお初

⁷⁸廣瀬南雄・籾含雄『意識真宗聖典：三経七祖』（1923）法蔵館 p.119-p.159

⁷⁹梶原正昭・山下宏明校注新日本古典文学大系 45『平家物語下』（1998）岩波書店 p.408

⁸⁰同前掲梶原正昭・山下宏明『平家物語下』 p.409

と徳兵衛が、「未来へ廻向し後の世もなをしも一つ蓮」という一蓮托生への願いは、はたして実現できるのでしょうか。

仏教では、現世への執着を持ったまま死ねば、後生がよくないという。以上のように、現世への執着、煩悩を断ちきれずに心中を遂げた男女は、本来の仏説からすれば、成仏するどころか、一つのはちすに転生できるかどうか、これも疑問である。ところが、『曾根崎心中』では心中の思想は浄土信仰と結びついて、死に赴く人が一蓮托生のことを深く信じることによって、「未来成仏疑ひなき恋の手本となりにけり」というように、未来成仏し恋の手本になった。しかし、このような考え方は、本来の仏教思想と矛盾しているのではないかと思う。

このような本来の仏教思想と剥離している観念は、『曾根崎心中』だけではなく、平安時代の文学作品にも見られている。細田季男によると、「一蓮托生」という言葉は「おなじ蓮」に由来し、このような考えは平安時代にすでに成立したという。極楽の蓮の上までも変わらない思いでいたいという一蓮托生の願いは、『源氏物語』にも見られている⁸¹。

『源氏物語』では、「おなじ蓮」のことが次のように述べられている。たとえば、「阿弥陀仏を心にかけて念じたてまつり給。おなじ蓮にとこそは、なき人をしたふ心にまかせてもかげ見ぬ三つの瀬にやまどはむ」（「朝顔」）⁸²、「生ける世に行き離れ、隔たるべき中の契とは思かけず、おなじ蓮に住むべき後の世の頼みをさへかけて、年月を過ぐし来て」（「若菜上」）⁸³、「蓮葉をおなじ台と契をきて露のわかるゝけふぞかなしきと、御硯にさし濡らして、香染めなる

⁸¹細田季男「おなじ蓮に考」（『比較文化論叢 11』所収）（2003）札幌大学 p.141

⁸²柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎校注新日本古典文学大系 20『源氏物語二』（1997）岩波書店 p.272

⁸³柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎校注新日本古典文学大系 21『源氏物語三』（1995）岩波書店 p.280

御扇に書きつけ給へり。宮、へだてなく蓮の宿を契りても君が心やすまじとす
らむ」(「鈴虫」)⁸⁴、「後の世にはおなじ蓮の座をも分けん、と契かはしきこえ
給て、頼みをかけ給御中なれど」(「御法」)⁸⁵と、「おなじ蓮」のことが書かれ
ている。つまり、死後極楽浄土では、夫婦は後ろから来る人のため蓮の台をわ
けて、来世の契りを互いに誓っているという。

以上のように、近松門左衛門は『源氏物語』に見られる「おなじ蓮に」の思
想を伝承して、それを『曾根崎心中』に応用した。『曾根崎心中』では、お初
と徳兵衛は恋人の身分でいっしょに心中したが、作中に二人が「取伝へ貴賤群
集の廻向の種。未来成仏疑ひなき恋の。手本となりにけり」と、一蓮托生、未
来成仏のことが描かれている。しかし仏教の観点からすれば、これは考えられ
ないことである。近松がこのような美しい心中の結果を書いたのは、当時社会
に影響を与えている世俗化された仏教と関連があると思われる。特に、日本の
浄土信仰の救済思想は江戸時代の庶民に広く受け取られたことにも関係があ
ると思う。以下、『曾根崎心中』に現われた浄土教の救済を中心に論究してい
きたい。

第四節 浄土信仰の救済思想

植野慶子によると、鎌倉仏教では、女人成仏・女人往生が教義上の問題だけ
でなく、民間の女性を救済する立場からも説かれるようになった。しかし、こ
れを説いた法然や日蓮などは、女性の五障・三従を肯定しているという。植野

⁸⁴柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎校注新日本古典文学
大系 22『源氏物語四』(1996) 岩波書店 p.72

⁸⁵同前掲柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎『源氏物語四』
p.163

慶子は、女性が地獄の使者、三千世界の男女の諸々の煩惱を集めて女人一人の罪業となるなど、『法華経』などの仏典から女性のマイナスイメージを集め、女性が本来罪業深い存在であるが、『法華経』の功德や阿弥陀仏の本願によって女性が成仏・往生できることを述べている⁸⁶。前節にも述べたが、仏教の観点からすれば、執着を持つ心中した男女は「一蓮托生」が成就できるどころか、未来成仏もできない。ところが、『曾根崎心中』では、心中した徳兵衛とお初は「未来成仏疑ひなき」と、救済できると考えられている。では、なぜこのような救済思想が生みだされたのであろうか。

『曾根崎心中』に見られる救済思想は、実は日本の浄土信仰と深くかかわっていると思われる。以下、浄土信仰に関する浄土教の思想を取り上げて、『曾根崎心中』に見られる救済思想を探究する。

たとえば、『曾根崎心中』ではお初と徳兵衛が心中する前に「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と唱えることが書かれている。では、何故お初と徳兵衛はひたすら「南無阿弥陀仏」と唱えたのであろうか。ここで、まず法然の「専修念仏」の思想から述べてみよう。

法然は、ただ「南無阿弥陀仏」という名号にすべてを託する浄土の教えのみが末法濁世を生きる衆生を救済しようとする「専修念仏」の立場に立った。凡夫は、阿弥陀仏によって摂め取られることを信じてひとむきに名号を唱える以外に、救済への手立てを有しえないという⁸⁷。

法然上人の生涯の行状を描いている『法然上人行状絵図』では、次のことが記されている。『法然上人行状絵図』によると、建永二（一二〇七）年二月二十八日に、法然の土佐国配流の宣旨が下され、九条兼実の奔走により配流先は

⁸⁶植野慶子「江口の遊女と普賢菩薩との同一性—女人救済の問題を中心に」（『日本文学誌要』所収）（1993）法政大学 p.42

⁸⁷同前掲伊藤益『日本人の愛—悲憫の思想』 p.195

讃岐国となり、三月十六日に出立となったという⁸⁸。そして、室津の港から海へ舟で押し出したとき、遊女が舟で追いかけてきて、自分のような罪深い身ではたして救われるのだろうか、と問いかけている。これに対して、法然は「何が故ぞ、ただ念仏の一門を勧むるや」⁸⁹と、ただひたすら念仏せよ、と述べている。法然は遊女に念仏のことを教えて、その遊女が念仏往生をとげたことが次のように記されている。

同国室の泊につき給に、小船一艘ちかづきたる、これ遊女がふねなりけり。遊女申さく上人の御船のよしうけたまはりて推参し侍なり。(中略) この罪業おもき身、いかにしてかのちの世たすかり候べきと申ければ、上人あはれみでの給はく、(中略) もはら念仏すべし、弥陀如來は、さやうなる罪人のためにこそ、弘誓をもたてたまへる事にて侍れ、たゞふかく本願をたのみて、あへて卑下する事なかれ、本願をたのみて念仏せば、往生うたがひあるまじきよし、ねんごろにをしへ給ければ、遊女隨喜の涙をながしけり。(中略) 一すぢに念仏し侍しが、いくほどなくて臨終正念にして往生をとげ侍きと、人申ければ、しつらんしつらんとぞおほせられける⁹⁰。

以上述べたことから見ると、法然が唱えている念仏往生は、誰にも通用できる。たとえ身分の低い遊女であっても、念仏を通して救済されるという。つまり、どんな身分の人であっても、臨終の時、ひとむきに念仏すれば、西方極楽浄土に往生できることが明らかである。このような念仏往生の思想は平安時代

⁸⁸中村直美「遊女考—『法然上人行状絵図』・『和漢朗詠注』」(『仏教大学大学院紀要』所収)(2008) 仏教大学 p.146

⁸⁹同前掲大橋俊雄校注『法然・一遍』 p.12

⁹⁰藤堂祐範・江藤激英『法然上人行状絵図』(1924) 中外出版 p.306-307

の『梁塵秘抄』にも見られている。

『梁塵秘抄』の「梁塵秘抄口伝集卷第十」では、「遊女とねくろが戦に遭ひて、臨終の刻めに、「今は西方極楽の」とうたひて往生し」⁹¹たことが記されている。『梁塵秘抄』に書かれている遊女が死ぬ前に、「今は西方極楽の」を念じることは、『曾根崎心中』に見られるお初が「南無阿弥陀仏」を唱えることとは少し異なっているが、極楽浄土往生への憧れが同じとも言えよう。

また、平安末期の仏教説話集『宝物集』では、遊女の念仏往生も書かれている。神崎の遊女と随行の男が海賊に殺される時、「西方にかきむけられて、(中略)今は西方極楽の、弥陀の誓を念ずべし」⁹²というように、西方極楽浄土に向って阿弥陀仏に祈って往生した。そして、建長四(一二五二)年に成立された『十訓抄』では、上述した念仏往生のことも記されている。「神崎の君とねくろ、男に伴ひてつくしへ行きけるが、海賊にあひて、あまた所手おひて、しなんとしける時、我れ等何しにおひぬらん、おもへばいとこそあはれなれ、今は西方極楽の、みだのちかひを念ずへし」⁹³というように、念仏往生のことが書かれている。『宝物集』と『十訓抄』に見られる念仏往生は法然の思想と一致するとも言えよう。

藤本浄彦は、法然の「専修念仏」の思想について、次のように述べている。南無阿弥陀仏の名号を口に称える只中において、「至心に専らこの阿弥陀仏の名号を念ずれば、すなわち、彼の仏は無貪の清浄の光を放ちて照触し攝取したまうがうえに、姪貪財貪の不浄を除き、無罪破戒の罪を滅し、無貪善根の身となりて、持戒清浄の人にひとしきなり」といわれるほどのあり方が実現するの

⁹¹新聞進一・外村南都子校注『梁塵秘抄』(1989)小学館 p.334

⁹²小泉弘・山田昭全・小島孝之・木下資一校注新日本古典文学大系 40『宝物集・閑居友・比良山古人霊託』(1996)岩波書店 p.345

⁹³石橋尚宝『十訓抄詳解』(1923)明治書院 p.136

である⁹⁴。

以上は『法然上人行状絵図』に見られる法然の救済思想である。一方、法然の弟子である親鸞は、阿弥陀仏の本願のもとで衆生が救われるという法然の教説に内含され、悪性を払拭しえない凡夫の救済という視点を強調し、社会的な卑賤視の対象とされる人々も救われる可能性を模索することによって、法然の思想を徹底させた⁹⁵。親鸞によると、この世にいる衆生みんなが「悪人」であり、悪人こそが阿弥陀仏の本願による救済の正主であって救われる対象であるという。『曾根崎心中』では、お初は身分の低い遊女で、徳兵衛は普通の町人である。しかし、以上述べた親鸞の悪人正機からすれば、この二人が阿弥陀仏に救済され、極楽浄土に往生することは疑いないであろう。

そして、親鸞の浄土真宗では、亡くなった人は必ず先立って浄土で家族や愛する人を待っているから、人間が死後に、極楽浄土で会うことができるという⁹⁶。このことは親鸞が説く「俱会一处」の思想と深くかかわっている。俱会一处とは、先に浄土に往生している人と、同じ浄土に生まれたいということである。「この身はいまはとしきはまりて候へは。さためてききたちて。往生し候はんすらは、浄土にてかならず／＼まちまいらせ候へし。あなかしこ／＼」⁹⁷と『末燈鈔』にも書かれているように、この世で人々の結ばれた宿縁は、必ず西方極楽浄土に往生し、一緒に成仏するという。以上のように、親鸞が説く「俱会一处」の思想は、『曾根崎心中』に見られる一蓮托生の思想と共通している部分があるとも言えよう。

⁹⁴藤本浄彦「法然浄土教における救済概念の一考察」(『悟りと救い—その理念と方法』所収)(1979)平楽寺書店 p.264

⁹⁵同前掲村松剛『死の日本文学史』p.196

⁹⁶同前掲中村元『仏教思想1 愛』p.288

⁹⁷南条文雄・前田慧雲・村上専精『親鸞聖人全集下巻』(1906)前川文榮閣 p.267

親鸞だけでなく、日蓮宗の宗祖である日蓮も、夫婦と一緒に成仏することが可能であることを述べている。「兵衛志殿女房御書」では、夫婦成仏のことが次のように書かれている。「凡夫にてあらん時は世生生夫婦とならん仏にならん時は同時に仏になるべし」⁹⁸というように、日蓮は夫婦成仏を肯定している。

『曾根崎心中』では、お初と徳兵衛心中する前に、「未来へ廻向し後の世もなをしも一つ蓮」と祈り、その心中の結果は、「取伝へ貴賤群集の廻向の種。未来成仏疑ひなき。恋の手本となりにけり」と書かれており、二人は死後一つの蓮に成仏し、恋の手本になるという。このような心中の結果は、法然の念仏往生、親鸞の俱会一処、日蓮の夫婦成仏などの救済思想にも関連があると思う。このように考えてみれば、何故徳兵衛とお初は未来成仏ができ、恋の手本となることも理解できよう。

⁹⁸日明「兵衛志殿女房御書」（『日蓮上人御遺文』所収）（1904）祖書普及期成会 p.1537

第五章 結論

本論は近世文芸作品に見られる仏教思想から『曾根崎心中』における救済思想を中心とする研究である。第一章では、本論の研究動機、研究目的、先行研究、研究内容および研究方法について述べた。まず、本論は仏教思想の観点から『曾根崎心中』について論述した。次に、仏教の浄土信仰を通して、作品に見られる救済を取りあげた。この研究方法によって、『曾根崎心中』に見られる仏教思想と本来の仏教思想を比較し、今までの研究があまり触れなかった日本の浄土信仰をめぐって、『曾根崎心中』を異なる観点から新しい見解を見出したいと思っている。

第二章では、心中の文化史をはじめ、近松文学の特色とその一番有名な心中物である『曾根崎心中』について述べた。まず、心中の起源と近世心中が流行になった理由を論述した。次に、近松の心中物をめぐって、主人公たちが心中した理由を見てみた。そして、近松の作品が何故当時の人々を魅了させたのか。このことから近松文学の特色を論究してみた。最後に、『曾根崎心中』について述べて、主人公たちはどのように心中の道に行ったのか、と詳しく述べてみた。

第三章では、『曾根崎心中』に書かれている一番はじめの「観音廻り」と、一番最後の「心中の道行」を中心に、この二つの場面に見られる仏教思想について論じた。まず、観音廻りとは何かを説明した。それから、日本の観音信仰の源流や歴史などを述べながら、江戸時代に観音廻りが流行した理由についても論じてみた。『曾根崎心中』の心中の道行では、お初と徳兵衛が最期を迎える時、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」という称名念仏、徳兵衛が自身の罪を

反省することが書かれている。これらのことは法然の「念仏往生」や親鸞の「悪人正機」などの救済思想にも関連があると論述してみた。

第四章では、遊女思想、女性成仏、一蓮托生、未来成仏などの思想をめぐって、浄土信仰の観点から『曾根崎心中』における救済思想を論説した。本論にも述べたが、仏教では女性成仏のことがあまり説かれていない。本章では、まず、遊女と仏さまとの関連を述べながら、『新版歌祭文』『新古今和歌集』『撰集抄』『古事談』などの作品から女性成仏のことを考察した。次に、『法華経』に見られる竜女の成仏、『観無量寿経』に記されている韋提希夫人の成仏、『平家物語』に書かれている建礼門院の往生を述べながら、女性成仏のことについても論じた。『曾根崎心中』では、お初と徳兵衛の心中は「未来へ廻向し後の世もなをしも一つ蓮」、「未来成仏疑ひなき恋の。手本となりにけり」と書かれており、一蓮托生と未来成仏という結果となった。いったいお初と徳兵衛は本当に一蓮托生し、未来成仏できるのであろうか、これについても論述した。

本論においても述べたが、『曾根崎心中』には多くの仏教思想が見られている。この作品の一番最初の観音廻りと、最後の心中道行からも分るように、仏教の救済思想が明らかに見えている。ここで、あらためて高島元洋の解釈を借りて、観音廻りに見られる救済思想について述べてみよう。

高島元洋によると、『曾根崎心中』では、観音となったお初は徳兵衛を救ったという。このことについて、高島元洋は、次のように述べている。高島の解釈によれば、観音廻りがまず謡曲『田村』の「げにや安楽世界より。今此娑婆に示現して。我らがための観世音仰ぐも高し高き屋に」からはじめ、お初が駕籠から出て、「十八九なるかほよ花。今咲出しの。初花に笠は着ず共」と書かれている。『田村』の舞台は「地主の桜」が「花盛り」の清水寺であり、この桜の美しさに観音の「大悲の光」が降りそそぐ。そして、今観音にかわって登場するお初の姿には、花盛りに示現する観音像が重ね合わされているかのよう

であるという⁹⁹。以上のように、この作品では、お初が登場してから、すでに観音として示現されて、お初が観音の姿で現われたとも言えよう。

また、三十三所の巡礼が終わった後、お初はみずから身を情に關しての煩惱に沈めてゆくことで、「煩惱即菩提」を示すのはお初自身であった。その煩惱に沈む心に観音が喚起されて、お初は結局観音の姿と重なって映るのであるという¹⁰⁰。そして、観音廻りの一番最後のところに、「色で。道引情で教へ。恋を菩提の橋となし」というように、お初自身の煩惱が菩提の橋で、最後に観音と重なった。したがって、徳兵衛は観音となったお初に救われたという。

実は以上述べたお初が観音と重なったのは、前章で論述した女性成仏と遊女のことと関連があると思う。すでに述べたように、勝浦令子の解釈によれば、女性は欺・怠・瞋・恨・怨という五障を持っているので、死後成仏できないという。しかし、『法華經』に書かれている竜女成仏、『觀無量壽經』に書かれている韋提希夫人のことから見れば、仏教では女性が成仏できないとは言えない。そして、仏典だけではなく、日本の文学作品にも女性成仏のことが見られている。すでに述べた『平家物語』の建礼門院が死後極樂浄土に往生して成仏したことは、この典型的な例でもある。また、『今昔物語集』にも、女性成仏のことが見られている。『今昔物語集』の卷十五「近江国坂田郡女往生語第五十二」では、近江国の女の人が弥陀仏を供養し、臨終の時に聖衆が迎えに来て、極樂浄土に往生したことが記されている¹⁰¹。以上のように、女性成仏のことは仏典だけでなく、日本の文学作品にも記されていることが知られよう。

そして、佐伯順子によると、古代では遊女に神と性を交わすことを任せ、遊女が神に仕える巫女の一種であった。巫女はもとより神の意志を伝えるもので

⁹⁹同前掲高島元洋「情による超越—他界から虚構へ」 p.120- p.121

¹⁰⁰同前掲高島元洋「情による超越—他界から虚構へ」 p.120

¹⁰¹同前掲馬淵和夫・国東文麿・今野達『今昔物語集二』 p.170-171

あるが、後に性を通して人を浄化するようになったという。このことから考えてみれば、遊女が人を救済する思想は古代からすでに見えている。一方、『新古今和歌集』・『撰集抄』・『古事談』などにも遊女が仏さまの姿で表わすことが書かれている。滝川政次郎によると、大坂にある慈眼寺の十一面観音が江口の遊女の遺跡であるという。以上述べた遊女のことから考えてみれば、お初が観音廻りの終わりに観音と示現して、徳兵衛を救うことも理解できよう。

一方、お初自身で示した「煩惱即菩提」について、相良亨は次のように述べている。相良亨によると、「煩惱即菩提」とは、浄土教が、死への悲しみを人間の抜きがたい煩惱とし、人間の現実をみつめ、煩惱の深さに絶望してすがりつく凡夫をそのままに阿弥陀仏が救済するという¹⁰²。『曾根崎心中』では、お初と徳兵衛は「恋に乱るゝ妄執」、「恋の奴に荷なはせて」と書かれて、二人の恋を明らかに煩惱と捉えている。以上のように、お初と徳兵衛は同じ煩惱が満ちている人間である。したがって、この二人は煩惱即菩提という思想によって救済されると考えられよう。

浄土信仰の思想は以上述べた「煩惱即菩提」だけではなく、本論でも論じたが、「一蓮托生」の思想も日本の浄土信仰から生れたものである。お初と徳兵衛が死後同じ蓮の上に生まれるという「一蓮托生」の願いについて、相良亨は次のように述べている。一蓮托生という言葉は、仏典にある語ではなく、日本の浄土信仰から生れた考えであるという。中国の仏教とインドの仏教には、死後、主従関係あるいは親子関係と一緒に蓮の上に生まれ変わることは絶対にならない、と相良亨が指摘した¹⁰³。そして、一蓮托生の意味について、相良亨は次のように述べている。相良亨によると、一蓮托生は、中世末の「説経」の『かるかや』にすでに出ていたという。「この世でこそは 親とも子とも姉弟とも

¹⁰²同前掲相良亨「日本人の死生観」p.72

¹⁰³同前掲相良亨「日本人の死生観」p.94

御名乗りなけれども 来世にては 親とも子とも 一家一門 六親眷族 七世の父母に至る迄 一つ浄土へ御参りある」¹⁰⁴というように、家族と一緒に修行して、死後一つの浄土に生まれるという¹⁰⁵。

『かるかや』では、一蓮托生は家族が極楽浄土に往生して、一つの蓮の上で修行することを意味しているが、『曾根崎心中』では、お初と徳兵衛が同じ蓮の台に生まれて、恋を成就させたいことを祈っていると書かれている。以上のように、『かるかや』と『曾根崎心中』に見られる一蓮托生の思想は違っている。『曾根崎心中』における一蓮托生は、仏教の説経集に出ている一蓮托生とは異なっている。では、恋人同士のお初と徳兵衛は、はたして死後一蓮托生ができるのであろうか。このことについて、近松が次のように述べている。『曾根崎心中』の一番最後のところに、近松は「未来成仏疑ひなき恋の。手本となりにけり」と、二人に美しい心中の結果を与えて、恋が成就できたという。このように考えてみれば、『曾根崎心中』に見られる一蓮托生の思想は、『かるかや』の一蓮托生の思想とは明らかに矛盾している。このような恋人が死後一つの蓮の台に生まれるという一蓮托生は、本来の仏教思想と異なると言わなければならない。

では、何故家族は来世同じ蓮に生まれることができるが、恋人は死後一蓮托生ができないのであろうか。これについて、徐翔生は、以下のように述べている。仏教では仏の衆生に対する愛、親の子に対する愛が多く説かれているが、男女の愛についてはあまり説かれていない。仏教では、男女間の愛は一種の執着であるため、常に愛執や愛着などと呼ばれている。したがって、仏教では、

¹⁰⁴信多純一・坂口弘之校注新日本古典文学大系 90『古浄瑠璃・説経集』（1999）岩波書店 p.312

¹⁰⁵同前掲相良亨「日本人の死生観」 p.94

われわれ人間は欲望をもたず、すべての愛着や愛欲を断ち、正しい修行道によらなければならないという¹⁰⁶。

上述したように、仏教では、男女の恋が一種の執着とみなされているから、この執着を否定している。雲井昭善は、本来の仏教の立場が、無我を説き我執・我所執を極力否定しようとし、人間の本性に根ざす欲望は、すべて否定すべきものであると述べている¹⁰⁷。また、藤田宏達によると、仏教では人倫的な愛、宗教的対象に対する愛は肯定されているが、執着としての愛は認められていないという¹⁰⁸。このように考えてみれば、恋を完成するために死に行くお初と徳兵衛の心中は、仏教の思想では認められないことである。

以上述べたことから考えてみると、仏教では、お初と徳兵衛の恋は否定されている。では、何故『曾根崎心中』の一番最後のところに、「未来成仏疑ひなき恋の。手本となりにけり」と書かれており、お初と徳兵衛の恋が完成されたのであろうか。これは日本の浄土信仰と深くかかわっていると思う。特に法然が説く「念仏往生」と、親鸞の「悪人正機」という浄土信仰の思想と関連があると言わなければならない。

周知のように、法然と親鸞が説く浄土教の思想は、中世から日本社会に深く影響を与えている。浄土教の興隆によって、死後の世界が極楽浄土となったので、それまでになかった死後の救済が現われてきた。そして、近世に入っても、日本文学では仏教の極楽浄土のイメージが見られている。このことを述べるのに、まず近世の時代背景と宗教思想から論じてみたい。

実は近世に入ると、幕府はキリスト教を禁制するために寺請制度や檀家制度などを設けた。そのために、仏教がその本来の機能を失ったように見える。一

¹⁰⁶同前掲徐翔生「曾根崎心中に見られる仏教」p.33

¹⁰⁷雲井昭善「原始仏教に現われた愛の観念」(『仏教思想1 愛』所収) p.41

¹⁰⁸藤田宏達「初期大乘経典にあらわれた愛」(『仏教思想1 愛』所収) p.99、p.109

方、国学者である本居宣長は国学を提唱した。国学とは、『古事記』などの日本の古典を研究し、日本独自の思想を明らかにしようとする学問である。国学の流行にしたがって、近世では神道の研究も重視されるようになった。以上のように、近世の日本社会では神道、仏教、儒教の思想が溢れているので、近世の日本は神・仏・儒教の時代とも言えよう。

しかし、たとえ仏教が幕府に管理されても、近世の日本社会は依然として仏教から強い影響を受けていた。特に法然と親鸞が説く浄土教の思想は近世の日本社会にも大きな影響を与えている。まず、法然の念仏往生から考えてみよう。

相良亨によると、仏教では、念仏はもとより仏を観念するという観想念仏であったが、日本では称名念仏であるという。『曾根崎心中』では、お初と徳兵衛が「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」を称えながら、死を迎えることが書かれている。これは浄土信仰の「念仏往生」という法然の思想と関連があると思う。法然のこのような思想は、実は天台宗の僧である源信が念仏の正しいあり方として捉えたもので、衆生は「往生の業は称名にて足るべし」（『往生要集』）という。源信の思想を受けついで法然によって、これがさらに一步すすめられ、称名こそが仏の本願に順う正しい業であるとし、念仏往生が唱えられたことは人の知るところであるという¹⁰⁹。

『曾根崎心中』における救済は、法然の「念仏往生」だけでなく、親鸞の「悪人正機」「俱会一处」にも関連があると思っている。作中では、徳兵衛が心中する前に、平野屋の主人である叔父に恩を返されないことを後悔し、「亡き跡までもとやかくと。御難儀かけんもつたいなや。罪を許して下さい」というように、それが「罪」だと思っている。「罪を許して下さい」という言葉からも分るように、徳兵衛には罪の意識を持っており、「悪人」という自覚を持っている。このような覚悟があるので、救済される対象になるとも考えられよう。

¹⁰⁹相良亨「日本の思想」（『相良亨著作集 5』所収）（1992）ペリかん社 p.315

また、親鸞の説く「俱会一处」の思想は、実は『曾根崎心中』に見られる一蓮托生の思想にもかかわりがあり、浄土信仰の救済思想も潜んでいる。「俱会一处」とは、人間は先に浄土に往生している人と、同じ浄土に生まれることができることであるという。俱会一处の思想から考えてみれば、お初と徳兵衛が一蓮托生し、未来成仏できると考えられよう。このような考えは親鸞だけでなく、夫婦成仏を説く日蓮の思想にも見られている。

以上述べてきたように、仏教では人間が執着・愛欲を捨てなければならないことが強調されている。しかし、本論で論じてきたように、『曾根崎心中』では、仏教の一蓮托生、未来成仏などの救済思想が見られている。このような救済思想は、本来の仏教思想とは少し異なっているが、法然の念仏往生、親鸞の悪人正機、俱会一处などの救済思想と深くかかわっている。そのために、『曾根崎心中』では、お初と徳兵衛の心中は「後の世もなをしも一つ蓮」「未来成仏疑ひなき恋の手本となりけり」という美しい結果が現われたのであろう。これこそ、この作品に一番忘れがたいところではないかと思う。

参考文献

本論では、『曾根崎心中』からの引用は、井口洋校注「曾根崎心中」新日本古典文学大系 91『近松浄瑠璃集上』（1993）岩波書店による

テキスト

井口洋校注「曾根崎心中」新日本古典文学大系 91『近松浄瑠璃集上』（1993）

岩波書店

川端善明・荒木浩校注新日本古典文学大系 41『古事談・続古事談』（2005）岩

波書店

梶原正昭・山下宏明校注新日本古典文学大系 45『平家物語下』（1998）岩波書

店

小泉弘・山田昭全・小島孝之・木下資一校注新日本古典文学大系 40『宝物集・

閑居友・比良山古人霊託』（1996）岩波書店

坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注日本古典文学大系 68『日本書紀

下』（1978）岩波書店

信多純一・坂口弘之校注新日本古典文学大系 90『古浄瑠璃・説経集』（1999）

岩波書店

新聞進一・外村南都子校注『梁塵秘抄』（1989）小学館

守随憲治訳注『近松世話物集』（1982）旺文社文庫

西野春雄校注新日本古典文学大系 57『謡曲百番』（1998）岩波書店

柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎校注新日本

古典文学大系 20・21・22『源氏物語二・三・四』（1995・1996・1997）岩波書

店

馬淵和夫・国東文麿・今野達『今昔物語集二』（1992）小学館

三角洋一校注新日本古典文学大系 50『とはずがたり・たまきはる』（1999）岩波書店

峯村文人校注『新古今和歌集』（1992）小学館

史料

石橋尚宝『十訓抄詳解』（1923）明治書院

植木雅俊訳『法華経下』（2010）岩波書店

大橋俊雄校注日本思想大系 10『法然・一遍』（1971）岩波書店

大橋俊雄校注『選択本願念仏集』（1999）岩波文庫

戸頃重基・高木豊校注日本思想大系 14『日蓮』（1970）岩波書店

南条文雄・前田慧雲・村上専精監修『親鸞聖人全集下巻』（1906）前川文榮閣

圓位「撰集抄九巻」『撰集抄発心集・宝物集』（1983）名著普及会

日明「兵衛志殿女房御書」『日蓮上人御遺文』（1904）祖書普及期成会

廣瀬南雄・瀧含雄『意識真宗聖典：三経七祖』（1923）法蔵館

星野元豊・石田充之・家永三郎校注日本思想大系 11『親鸞』（1971）岩波書店

了恵編・西村九郎右衛門校注『黒谷上人語燈録・和語灯録下』（1881）護法館

参考文献

- 荒木繁（1987）「近松の歴史的意義についての覚書」『近松』有精堂
- 石田瑞麿（1985）『日本古典文学と仏教』筑摩書房
- 伊藤益（2000）『日本人の愛—悲憐の思想』北樹出版
- 大原健士郎（1973）『心中考—愛と死の病理』太陽出版
- 沖本克己（2011）『新アジア仏教史 8』佼成出版社
- 河竹繁俊（1994）『近松門左衛門』吉川弘文館
- 河竹登志夫（2001）『歌舞伎』東京大学出版会
- 小林忠（1987）『江戸の画家たち』ぺりかん社
- 佐伯順子（1987）『遊女の文化史』中央公論社
- 相良亨（1992）「日本の思想」『相良亨著作集 5』ぺりかん社
- 相良亨（1993）『超越の思想』東京大学出版会
- 相良亨（1994）「日本人の死生観」『相良亨著作集 4』ぺりかん社
- 信多純一（1991）『近松の世界』平凡社
- 新村出（1997）『広辞苑』岩波書店
- 勝浦令子（2010）「女性と仏教」『新アジア仏教史 11』佼成出版社
- 滝川政次郎（1965）『遊行女婦・遊女・傀儡女』至文堂
- 滝川政次郎（1975）『遊女の歴史』至文堂
- 田中澄江（1984）『近松門左衛門という人』日本放送会
- 藤堂祐範・江藤激英（1924）『法然上人行状絵図』中外出版
- 中村元（1986）『仏教思想 1 愛』平楽寺書店
- 中村元（1985）『仏教思想 4 恩』平楽寺書店
- 中山太郎（1974）『日本巫女史』八木書店
- 野村育世（1990）『日本女性史 2 中世』東京大学出版会
- 速水侑（2007）『観音信仰』雄山閣

- 藤野義雄（1980）『近松と最盛期の浄瑠璃』桜楓社
- 藤本浄彦（1979）「法然浄土教における救済概念の一考察」『悟りと救い—その理念と方法』平楽寺書店
- 宮原英一（1998）『若き日の近松門左衛門』叢文社
- 村松剛（1975）『死の日本文学史』新潮社

論文

- 荒井貢次郎（1986-1987）「観音信仰と江戸系流通・芸能民—金竜山浅草寺等関係史料による」『印度学仏教学研究 35 卷 1 号』日本印度学仏教学会
- 植野慶子（1993）「江口の遊女と普賢菩薩との同一性—女人救済の問題を中心に」『日本文学誌要』法政大学
- 後小路薫（1986）「松誉巖的著述攷—西国洛陽三十三所の観音靈驗記を中心に」『大谷学報 66 卷 2 号』大谷学会
- 木坂元子（1956）「道行研究—近松世話浄瑠璃における」『日本文学』日本文学協会
- 岸田秀樹（2010）「曾根崎心中の歴史社会的分析—書評：小林恭二著『心中への招待状・華麗なる恋愛死の世界』」『藍野学院紀要・第 24 卷』藍野学院
- 清基秀紀（1991-1992）「真宗の土着（四）—親鸞における観音と宗教体験」『印度学仏教学研究 40 卷 2 号』日本印度学仏教学会
- 佐藤彰（1981）「曾根崎心中における表現の世界—「観音めぐり」からみた構造」『日本文学 30 卷 7 号』日本文学協会
- 指方依織（2005）「平安朝における一蓮托生思想について」『大谷大学大学院研究紀要第 22 号』大谷大学
- 徐翔生（2015）「曾根崎心中に見られる仏教」『政大日本研究第十二號』政治大

学

高野敏夫（2003）「遊女歌舞伎（六）」『岐阜聖徳学園大学紀要』聖徳学園大学

程茜（2014）「見立絵から見られる「聖」と「俗」—「遊女即菩薩」をめぐって」『年報日本思想史』日本思想史研究会

中村直美（2008）「遊女考—『法然上人行状絵図』・『和漢朗詠注』—」『仏教大学大学院紀要』仏教大学

沼義昭（1975）「救済者観音の構造—その秘儀をめぐって」『立正大学文学部論叢 053 号』立正大学

濱中修（1995）「御伽草子「和泉式部」「小式部」論」『国文学：解釈と鑑賞』至文堂

原道生（1963）「近松世話浄瑠璃の評価の問題—松田修氏の論考に触れながら」『日本文学』日本文学協会

細田季男（2003）「おなじ蓮に考」『比較文化論叢 11』札幌大学

松崎仁（1970）「近松作品の真実と虚構—曾根崎心中」『国文学：解釈と鑑賞』至文堂

向井芳樹（1956）「今宮の心中論—近松世話浄瑠璃の展開」『日本文学』日本文学協会

森山重雄（1956）「近松の方法—その町人倫理について」『日本文学』日本文学協会